

Title	慶應義塾大学医学所と大学医学部の創設：自然科学教育の重視
Sub Title	
Author	安田, 健次郎(Yasuda, Kenjiro)
Publisher	慶應医学会
Publication year	2009
Jtitle	慶應医学 (Journal of the Keio Medical Society). Vol.85, No.2 (2009. 4) ,p.79- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069296-20090400-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特 別 寄 稿

慶應義塾医学所と大学医学部の創設

自然科学教育の重視

慶應義塾大学名誉教授

やす だ けん じろう
安 田 健次郎

目 次

緒 言	
I. 慶應義塾医学所を発足させる発想の背景	80
1. 自然科学受け入れの素地	80
2. 福沢諭吉と儒学	81
a) 儒教理解	
b) 家庭から入った儒教の教義	
c) 自分から特に守った事項	
d) 福沢の主張の中で儒教的であると察せられる事項	
e) 儒教とは一線を描く点	
f) 儒教批判	
g) 儒者と数学	
3. 長崎遊学	82
4. 適塾での修学	83
a) 緒方洪庵の人物	
b) 適塾の学風	
c) 工芸技術に熱意	
d) 電気の新知識を得る	
e) 適塾時代の緒方洪庵による医療活動	
f) 物理学への理解を深める	
g) 「訓蒙 窮理図解」を執筆	
h) 物理学専攻への憧れ	
i) 自然科学習得後の漢学・儒学観	
j) 福沢における人文科学と自然科学の理解	
II. 慶應義塾医学所の創設	88
1. 明治維新後の医育機関の状況	88
a) 長崎医学校	
b) 東京医学校	
c) 長崎・東京に次ぐ官立医学校	
d) 公立医学校・病院	
e) 私立診療医育機関	
2. 慶應義塾医学所創設とその動機	89
a) その1	
b) その2	
c) その3	
d) その4	
註1. 松山棟庵	
註2. 前田政四郎	
註3. ヘボン	
3. 医学所の構成	90
註1. 新宮涼園	
註2. 杉田 武	
註3. 杉田玄瑞	
4. 医学所の学事	90
5. 医学所設置の背景	92
a) 西洋医学への期待	
b) 事前の西医養成	
c) 義塾発展の機運	
d) 長与専斎の動向	
e) 私立医育機関待望の状況	
6. 本塾との関係	92
7. 特筆すべき点	92
8. 明治13年廃校	93
a) 経営の困難	
b) 専任教員人事不安定	
c) 医学校増加	
d) 卒業生教員の寡少	
e) 医術開業試験	
f) 廃校の事後処理など	
III. 医学部の創設	93
1. 医学所廃校後の状況	93
2. 理科系学科増設の動き	94

3. 北里柴三郎と医学科	95
4. 医学科・化学科設置の決定	95
5. 敷地	96
6. 本科開校と開院	97
7. 福沢・北里の恩人達	97
a) 福沢諭吉関係	
緒方洪庵	
木村摂津守	
b) 北里柴三郎関係	
マンスフェルド	
長与専斎	
福沢諭吉	
コッホ	
知人：長谷川 泰，森村市左衛門，後藤新平	
8. 開学精神の発現	103
a) 関東大震災に際して	
b) 東京大空襲に際して	
9. 建築物，家具等	103
a) 食養研究所	
b) 予防医学教室	
c) 特殊薬科学研究所	
d) 予防歯科医学研究所	
e) は号病棟	
f) 基礎第二校舎	
g) 基礎第三校舎	
h) 西病舎	
i) 戦後復興時における大量の家具寄贈	
10. 額に残る福沢諭吉，北里柴三郎の訓言	105
福沢諭吉関係	
a) 独立自尊迎新世紀	
b) 贈医	
北里柴三郎関係	
c) 終始一貫	
11. 福沢諭吉，北里柴三郎と医学	106
12. 両巨頭に共通の諸点	106
結 語	

緒 言

福沢諭吉先生（以下敬称略）は明治6年に慶應義塾医学所を発足させ，約300人の医師を養成したが医育制度の変化，西南戦争の影響，財政負担の問題などから明治13年に廃校とした。福沢は明治34年に逝去したが，義塾には大正6年に北里柴三郎博士（以下博士略）を中心に医学部が創設された。医学所と医学部の間には37

年の空白があり，機構上の連続性は無いが，底流には福沢の自然科学志向，理科系教育重視の意思が脈々と流れていたと言われる^{27, 57)}。本文では福沢が成長の過程で受けた教育やその後の自己学習および体験の記録の中から，科学重視の考え方および自然科学系の教育の必要性を感得するに至る経緯を辿り，それを基とした医学所および医学部の創設について述べる。

I. 慶應義塾医学所を発足させる発想の背景

医学所創設の事情については互いに僅かに異なる数種の挿話があるが詳細は後述する。いずれにせよ，福沢家の台所で松山棟庵と立ちながら雑談中に，福沢が塾にて英文の医学校を立てる所存だかと切り出され，自分は資金を供給するから，あなたは時間を提供して教育をしてくれ，と言われた事が発足時の状況である。突然の提案のように見えるが常々考えていた事が機を得て発露したのであろう。では，その後ろ盾である科学への理解はどのようにして養われて来たのであろうか。数段階に分けて分析する。

1. 自然科学受け入れの素地

福沢は生まれつき手先が器用で手工芸・工作が上手であった。平生家族日常における下駄の鼻緒修繕，筆筈の鍵が開かない時に釘の先を曲げて開けたり，畳表のつけ替え，屋根の雨漏り修理などが挙げられるが下級士族一般の常として扶持米の不足を補うために刀剣細工の内職も始め，鞘に漆を塗り，金物の細工などの手工労働も行っていた。刀剣の小道具，金銀銅鉄やその他の生産原料に注意を向けてそれらの性質を知るに至る。その結果，自然の物質は祈祷や呪いでは動かない事，それらを利用するには自然の法則を知らなければならない事を理解する。そして自然の法則の微妙な事に感嘆し，この法則を知る事により自然に従って自然を支配する事すなわち，自然の物質を利用する事に絶大な喜びを感じるようになった。かくして，手先の器用さによる手工労働は自然法則への親しみを感じさせ，将来の自然科学受け容れの素地を助けたと言われる³³⁾。

（註）諭吉は福沢家の次男として生まれたが，生後間もなく中村家の養子となった。中村家は諭吉の叔父である福沢術平が養子に行った家であり，二代続けて福沢家から養子を入れた事になる。ただし，諭吉の場合，居所は変わらず，福沢家の中で育った。兄三之助の死亡により福沢家に復籍した。したがって，21才になるまでは中村諭吉であり適塾に在塾中で塾長（22才）になる以前の期間，文中では諭吉と記載する。

2. 福沢諭吉と儒学

文武両道は武士の嗜みであり、文の道としては儒学の教典である四書五経を漢文で読む事が一般に行われていた。儒教・儒学は道教や仏教のように宗教的世界観を説くよりも、人間の日常生活における道徳、倫理、礼儀などを説くものである^{9, 14)}。四書とは「大学」「中庸」「論語」「孟子」であり、五経とは「易経」「書経」「詩経」「礼経」「春秋左氏伝」の五経典である。諭吉は5才頃から近所で漢学塾を開いていた服部五郎兵衛に四書の素読を受けた。中津藩の藩校「進脩館」には下級藩士の子弟が通い辛い雰囲気があり、行っていない。8才頃、兄も通っていた野本真城（豊後の儒者帆足万里の高弟）の塾に通い、神童ぶりを発揮していたが、野本は天保14年（1843）に藩内の上士と下士との対立に端を発した事件に連座して他の藩に去る。しばらく、漢学の修業は中断。14～15才になった頃、自ら求めて、荻生徂徠を奉ずる筑前の亀井学派の白石照山（常人）について4～5年間学ぶ。照山は特に「詩経」と「書経」を好み、何度も講義してもらったと言われる。また、蒙求世説、左伝、戦国策、老子、荘子のようなものの講義も聞いた。これらは道徳的なものや、哲学的なものが主である。ただ、照山は朱子が儒教を再編成した朱子学を信用していなかったが、この点も彼に影響を与えている。その先、一人で「史記」を始め「五代史」「原明史略」「春秋左氏伝」などの歴史書を読んだ。特に五経の中の一つである「春秋左氏伝」は、春秋時代（紀元前400年頃）から戦国時代（紀元前221年頃）にかけての群雄の歴史であり、15冊から成るが、これを11回通読し一部は暗記した。普通は4～5冊読んで止めてしまう経典である^{35, 40)}。これにより、福沢の幕末から明治への日本の乱世を見る目が養われたと言えるかもしれない⁴⁰⁾。照山に師事した時点で、漢学の勉強は佳境に入り、福沢は「一通り漢学者の前座ぐらいになった」と語っている^{3, 31)}。白石もやがて藩内の職務分担に反対して去る。彼は二人の儒教の指導者を中津藩政の中で失う事になる。さて、江戸時代の儒学は多種あるが「朱子学」、伊藤仁斎・伊藤東涯の「古義派」と荻生徂徠の「古文辞学」に絞られる³⁵⁾。いずれも、「道」というもの、すなわち、人間の生き方、社会のあるべき姿を追求する哲学であるが、それぞれ特長がある。要点のみを記すれば、朱子学は人間、社会、国、宇宙は道徳的な法則・秩序に則って動くように出来ている。したがって、個人とくに支配者はその秩序や法則にはずれない生き方をすれば社会も国家も理想の形となる。このように、道徳的な社会を実現するのが「道」とであると説く。伊藤の古義学は孔子の「論語」に立ち返っ

て考える主張で、人間には生まれつきいいものはいい、悪いものは悪いと思う感情・人情がある。社会の成員が自分の人情に従って誠心誠意生きて行く事で「道」は実現されると説く。伊藤のある種の平等性は福沢の考えと一致する。福沢の父君百助が心酔した主旨で朱子学に批判的な内容であり、そこには指導者・支配者がまず修身して人々を感化するという考は入っていない。荻生徂徠は孔子以前の古代社会を記した「孔子」を思考の参考にする。客観的にものを認識しようとする態度であり、さらに、経験的、客観的に認識されたもののみを信ずるという主旨である。この点で、福沢は荻生徂徠的であると言われる³⁵⁾。上記のような江戸時代の儒教・儒学の教義と福沢の理解、思想との関係、評価などをみると次の諸点が挙げられる。

a) 儒教理解

学んだ教典等は上述の通りであり、内容は福沢自身に内蔵され理解されているとみる。

b) 家庭から入った儒教の教義

父百助は堀河の伊藤東涯が大信心で「誠意・誠心屋漏れに愧じず」に心掛けていた事を母から聞いている³⁾。またある時、兄にこれから何になるつもりかと聞かれ、大金持ちになって金を自由に使いたいと答えた。そして兄の心積もりを聞いたところ、自分は「死に至るまで孝悌忠信」と言った。これは父子の義（したしみ）、君臣の義（正しいありかた）、長幼の序（ならび）、朋友の信（まこと）、の主旨であり、儒教倫理の五倫として述べられている徳目である。

c) 自分から特に守った事項

何か漢書を読む中に「喜怒色に顕されず」の一句を読み金言だと思いこの教えを守ったと自伝に書かれている。

d) 福沢の主張の中で、儒教の徳目そのものではないが、儒教的であると察せられる事項

福沢は「不仁、不義、不忠、不幸は絶対にならぬ」と言っている。これは、「仁、義、礼、智、信」を尊ぶ儒教的倫理の五常という徳目と同じ印象であり、「気品の泉源」とも共通している^{3, 35)}。また、福沢は、松山棟庵への書簡の中で、個人の独立が家の独立に連り、家の独立が一国の独立に連り、一国の独立が天下の独立に連ると言われている。この発想は「大学」にある八条目の中の四項目「修身、齊家、治国、平天下」すなわち、正しい心を持って身を修めれば家は整い、国は治まり、天下平穏となるとの思考と似ている^{9, 22, 35)}。

e) 儒教とは一線を画す点

福沢は自分の教養の基礎は儒教であると言っている。漢書、儒教書を多く読むうちに、多くの教条・徳目に感動し、消化して取り込み自分のものとした訳であるが、中津での儒教修学の後の成長の過程、社会や環境の変化、洋学との接触、西洋の事情への開眼などの流れの中で形成された福沢の思考と、この三者、すなわち、朱子学の説く内容、伊藤東涯の主張、荻生徂徠の主旨、との間には相容れぬものもあり、福沢の将来の主張を理解する上で重要な点となっている。例を挙げると、朱子学は君臣や親子の別、上下の秩序を絶対視する大義名分論を唱えていたし、形式的で権威主義的であったし、儒者はもっぱら統治者たる君子は如何にあるべきかを教え、平民は養い難きものとして相手にしなかった^{21, 22)}。また、個人が実現する「道」は既定の道德である。そして、それを上の者が先ず治め下の者を導く。福沢の場合は定まった道德ではなく、独立した個人が「智識を開く」事によって認識して行くべきであると説く。伊藤仁斎・東涯の場合には既存の共同社会が円滑に動いていくための精神、倫理を追求している。福沢の場合には、新たな文明に向かって動いていかねばならぬと主張する。荻生徂徠が論議の目標していたのは中国の神話を模範として現実を考える事であるが、福沢は西洋近代文明を目標としている。また、徂徠の場合には優れた支配者が客観的な認識に基き適切な制度・社会を作るとするが、福沢の場合には個人が客観的に現実を認識し自ら独立する³⁵⁾。

f) 儒教批判

後年、福沢は実学尊重の精神から漢詩文を嫌い過激な言葉で儒教・儒者を罵る事になる³⁴⁾。「腐儒の腐説」を一掃するよう心掛けたとの記載もある³⁾。福沢は、儒教主義は決して純粋な道德学ではなく、大半政治学を混じると言っている。四書五経の每章毎句同じではないが、一筋にこの主義で貫いている。分析するならば、その成分の七分は治国平天下を占め、残余の三分通りが道德の部分である²⁾。福沢は孔孟を否定するのではない³⁾。すなわち儒教の倫理・道德・礼儀の徳目を否定しているのではなく、西洋文明に接し、日本も文明に目覚めなければならないと思ひ啓蒙の必要性を痛感している時に、儒教の封建性や階級性に拘っている次世代の人々に有益ではないとの観点からの儒教批判であろう。福沢は、西洋にあって儒教に欠けたものとして「有形において数理学と無形において独立心」を挙げている。ここで言う「有形」とは実証的で目で見えてわかる文明の事物、「無形」とはその文明を作っ

ている文明の精神あるいは人心や風俗、「数」は数学と解するべきではなく、科学一般あるいは法則科学を指し、「理」は合理的な論理を指すと理解されよう^{27, 34, 40)}。福沢が文明または文明の精神と表現したものはこれであった³³⁾。彼は自分自身の中に漢学が宿っている事を知っての上での儒教批判であった。

g) 儒者と数学

諭吉の成長過程における「道」の修業の経緯と、後年西洋文化に接してからの儒教観は上記のようであるが、儒教の中に、やがては医学所設立の動機付けになるような理科系あるいは自然科学系の内容はあったであろうか。諭吉が儒学を勉強している頃、中津藩士族の一部には数学が重んじられていた。豊後日出藩の大儒帆足万里の影響である。中津藩の隣の藩の学者で福沢の父百助も師事した。もともと漢学者であったが決心して蘭語を学び当時画期的な自然科学の著作を残した人である¹⁶⁾。数学を悦び、「鉄砲と算盤は武士の重んずべきものである。その算盤を小役人に任せ、鉄砲を足輕に任せて置くのは大間違い」と説き、この説が隣国の中津でも流行し、士族の有志者の中には数学に心を寄せる人が多く出、兄三之助も先輩に倣って算盤の高尚な所まで進んだらしいとの事である³⁾。諭吉自身の数学への関心の程度や学習については直接の記録はないが、帆足万里の影響は彼の生来の実証的傾向を幾分なりとも助長する性質のものであったと言える³⁴⁾。

3. 長崎遊学

嘉永6年(1853)に黒船が来航後、国内は動揺し、中津藩でも海防のために砲術を習得した者が必要となっていた。諭吉は、兄三之助の勧めにより蘭学を学び砲術を習得するために長崎に行く事になった。彼にとっては世界に目を開く第一の機転となる。安政元年(1854)兄が藩の公用により長崎に行くのに伴って長崎に行く。当時19才。長崎行きについては、中津藩家老奥平十学(後の壱岐)の長崎での砲術勉強上の雑用を依頼する人物として、以前に同じく野本真城に師事して漢学を習っていた諭吉が選ばれたのではないかとの記載もある⁴⁹⁾。いずれにせよ、長崎では奥平十学の母の実家である光永寺に十学と共に宿泊する。先ず、薩摩藩から長崎に遊学していた医師松平鼎甫にアルファベットを教えられ、次いで、通詞(通訳)榎原栄七、蘭方医石川桜所などに蘭語の手解きを受けた⁴³⁾。そして十学と同じく、山本重和(物次郎)という蘭学者の所へ西洋砲術を習いに通った。そのうちに、才能と認められ、十学に薦められて山本家

の食客となり、目の悪い山本の読書を助け家の雑用をも手伝った。山本家には、砲術家高島秋帆が「蛮社の獄」（幕府による蘭学者弾圧事件）の際に没収されその後返還された砲術関係の本が多数保管されており、有料で貸し出しを行っていた。諭吉はその本の貸し出し事務を担当した。当然それらの本を読む機会に恵まれ、砲学に精通していき、やがては鉄砲の設計図も引けるようになった¹⁶⁾。勉学は大変良く進んだが、これに焦った十学の奸計により安政2年（1855）2月には長崎を去る事になる。僅か一年間の遊学ではあった。しかし、漢学で育った諭吉が、不規則で断片的ではあったが蘭語を学び、蘭語による砲術の学習を通じて工学系の実地を体験した事は理科系の学術と実地に接する最初の体験となり大変有意義であった。将来の活動に向けての貴重な布石となったと思われる。それにしても、兄三之助の秀でた知性と時代感覚および弟の資質の正確な分析が諭吉を導き将来の勉学の方向性を与えた点で大きな貢献をしている事は特筆に値する。

4. 適塾での修学

適塾における勉学は福沢の人生にとって画期的な機会を作り出す動機付けとなり第二の転機と言われるが、長崎遊学から順調に大阪の適塾に入塾したわけではない。長崎では奥平十学は、家老の息子である自分が下級藩士の子である者に負ける事があってはならないとの判断から諭吉の母親が病気であるとの情報を流し、諭吉を中津に追い返そうと計画した。十学は父親の元家老奥平与兵衛定次に計画を話し、父親は中津にいる諭吉の従兄の藤本元岱（帆足万里門下の俊才で医者）を呼び、「母親が病気だから中津に帰れ」と福沢に伝える事を強要した。藤本は「お順」（諭吉の母親）に事情を打ち明け、二通の手紙を書いて諭吉に送る。一通は元家老から命じられた通りの内容、他の一通は「母親の健康を案ずる必要はない」との内容であった。諭吉は怒りを抑えながら安政2年（1855）2月に長崎を去り、江戸に出て勉強する計画を立て、一先ず大阪の兄の家に寄った。兄からは、中津の母親のもとに帰らなかった事を「親不孝め」と強く怒られた。そして、兄も承知の上で母親に相談せずに江戸に行く事は賛成出来ない。大阪にも蘭学の塾がある。伝手があるから、そこで勉強しろと言われ、大阪に留まり緒方洪庵の適塾に入塾した。中津藩の蔵屋敷のすぐそばであった。このような経過で同年3月に入塾、20才であった。ここで本当の蘭学修業が始まり、工学・医学の本を読み、学ぶ事になった。

a) 緒方洪庵の人物

多くの俊英を育て、医者であるが蘭語を教え教育者として秀でた人であり、峻厳さと優しさの入り交じった不思議な魅力を備えていた。福沢は「誠に類ひ稀なる高德の君子なり」（原文のまま、福沢全集緒言）と賛辞を述べている¹⁶⁾。緒方洪庵と諭吉との出会いは偶然であったが、辿ってみるとその因縁は意外に浅くないものがある。洪庵は岡山吉備地方の足守藩（3万5千石）という小藩の下級武士の家に生まれた（文化7年、1810）。諭吉よりも25才年長である。名は章、字は公裁、号は適々斎であり、初め三平と称し後に洪庵と改めた。足守藩の初代藩主は木下家定（1543～1608）で、豊臣秀吉の正妻は北政所で“ねね”というが、“ねね”の兄である。戦国時代を駆け抜け、関ヶ原の戦いでも生き残り足守におさまった⁵⁰⁾。家定の三男延俊が豊後の日出（ひじ）藩（3万石）の藩主となった。日出藩は中津藩の隣である。諭吉の父福沢百助の師事した帆足万里は日出藩の学者であり百助は隣の藩に行き勉強した。また、帆足万里は儒教の師でありながら数学を説き、西洋物理学の体系的紹介者で、「窮理学通」（物理学）を書く。兄三之助も影響された一人であり、従兄の医者藤本元岱は帆足に師事した。このような関係で、洪庵は初対面の時「中津から来たか」と言って親近の意を表したという。このようにして、日出藩を通じて洪庵と諭吉は多少の因縁を持つ事になる。洪庵は文政8年（1825）15才の時父親が大阪蔵屋敷留守居役を命じられたため大阪に出る。ここまでの家庭の事情は福沢家と極めて類似する。どうしても医者になりたくて、父の反対を押しきって大阪の蘭学者中天游の門人となり（天保元年、1830まで）、訳書により西洋医学を学んだ。この時から緒方三平と名乗る。その後天保2年（1831）上京して、江戸で最も有名な蘭方医である坪井信道に天保6年まで師事。蘭語、科学、医学の基礎を学ぶ。学問の進歩も早く坪井塾の塾長になった。坪井は深く洪庵の人物を愛し、自分の師であり、蘭学者、化学者として知られる宇田川玄真（榛斎）の門にも出入りせしめた。天保3年（1832）には宇田川の勧めで「人身窮理学小解」（註：人体生理学）などいくつかの翻訳を行う。苦学し下足番や按摩をやりながら学費を稼いだという。当時坪井の塾では「御札」は僅か大豆一升、自炊である代わりに部屋代はとらず、塾の経費は自分の医者としての収入で賄っていた。貧しい者には屢々無料で治療を施し「生き仏」と呼ばれていた。「とびきりの親切者でなければ医者になるべきではない」と言うのが

洪庵の口癖であったが、これは師坪井信道の後ろ姿を見て来た洪庵の実感である。洪庵は師の中に医者、そして教師の理想の姿を見出していた¹⁶⁾。その後、天保7年(1836)から天保9年まで長崎に留学し蘭人について医学を学ぶ。この時から緒方洪庵と名乗った。長崎では、天保7年に青木周弼、伊東南洋と共同でM. W. プラッヘの薬方書を訳し「袖珍内外方叢」と題した。天保9年1月に長崎を出、3月大阪で蘭学塾「適々斎塾、略して適塾」を開く。時に29才であった⁵³⁾。洪庵の教育は知識の習得だけではなくクリストフ・W・フーフェランド(ベルリン大学教授)著、ドイツ語から蘭語に翻訳された医学の倫理書を抄訳して「扶氏経験遺訓」と称し、内容を塾生に徹底的に教え込んだ。その中には「裕福な患者が払う一握りの黄金と、貧しい患者が両の目から流す感涙と、その心において軽重はない」というような文がならび塾生は自ら襟を正した¹⁶⁾。洪庵は前にも述べた「人身窮理學小解」以外に「病学通論」を嘉永2年(1849)に書いている。また、フーフェランドの本からヒントを得て「医師の義務」を内容とする「扶氏医戒之略」も書いている⁵³⁾。緒方の翻訳は分かりやすいことで知られている。現在用いられている健康、疾病、慢性、治療、遺伝病、流行病などの用語は緒方の造語であると言われている。

b) 適塾の学風

このような洪庵に諭吉は師事する事になった。適塾の入門帳328番であった。ここでは洪庵が江戸幕府に呼ばれるまでの24年間に入門帳に署名した者は611人であり、年毎に約100人、実際には全体でおよそ3,000人が教えを受けた^{50, 53)}。幕末から明治にかけて多くの俊才を生んだ。村田蔵六(後の大村益次郎)、橋本左内、大鳥圭介、長与専斎など多数(略す)。塾内では成績等級は八級ある。直上の級の者と一緒に原著を会読する事より勉強し、成績の良い者は順次昇級する。1級の上にはさらに最上級という級がありここでは互いに会読し、時には洪庵から直接講義を受ける事ができる。最上級の塾生の中で洪庵の代わりに講義が出来る者を塾長と呼ぶ^{16, 50, 53)}。塾長の下に塾監を置く。8級の下に無等という級があり、最上級を加えると十級あることになる。入塾するとまずグラマチカ(文法)とセインキタス(綴方)を学ぶ。その後、8級に属し、10~15人のグループとなり、10日に1~2回、7級の人と一緒に蘭語の原書を読んで訳す。会読という。各級に会頭を置く。会頭は塾長、塾監、最上級の人達が、学級の高低によってこれを分担する。

成績は会頭が決める。それぞれの階級で三ヶ月連続して一位であれば昇格出来る。高い点数を取った者が7級に昇級する。同塾所蔵の蘭書は物理学と医学合わせて10前後で、これらの一部を筆写して会読に出る。一回の会読量は半紙3~4枚。7級の人是一方で6級の人に教わる。この方式を「半学半教」と言い、適塾の特長であった。塾生は写本し、翻訳し、会読で良い成績を挙げるため、辞書を奪うようにして使った。しかし、辞書は唯一「ズーフ・ハルマ蘭日辞典」のみであった。これは、商館長ヘンドリック・ズーフがフランソワ・ハルマ著蘭仏辞典をもとにして通詞(通訳)吉雄如淵らの助力を得て作成したものであった。福沢は実質2年で安政四年(1857)塾長となる。その時22才で、塾長としては歴代最年少であった。洪庵は塾長ではない。塾生の中で一番出来る者が塾長である。この関係を福沢はやがて慶應義塾に取り入れられた。昇級していくと会読の相間に他の原書を読む余裕も出てくる。諭吉が、リセランドの生理学書三冊を三回も読み返したことは適塾の伝説になっていた。ここで塾生は物理学、化学、解剖学、生理学を学び、福沢の科学主義はこの時点で揺るぎないものとなっていたと想像される^{3, 34)}。

c) 工芸技術に熱意

適塾で物理学を学び西洋学術の妙に驚嘆した塾生は好んで物理化学の実験を試みた。福沢は塾長となり元来手工を好んでいたもので、おそらく率先してやったことであろう³⁴⁾。器機の事にせよ化学の事にせよ大体の道理は知っているから、どうかして実地で試みたいと思い、原書を見て図を写し似よりの物を拵える事はなかなか骨が折れた³⁾。長崎にいる時に、塩酸亜鉛があれば鉄に錫をつける事が出来るという事は聞いて知っていた。相談して、塩酸亜鉛を作ろうとした。塩酸のつくり方は書物を見ればわかる。書物によりどうにか塩酸を造り、それに亜鉛を溶かして鉄に錫を着ける試みは成功した。次に、ヨジウムを造ることになり書物を調べて昆布、荒布のような海藻類を採って来て焙烙で煎って試みたが失敗であった。火山昇華物などとして産する等軸晶系の、皮殻状または繊維状の塩化アンモニウムを製造する野心を起こした。第一の必要は塩化アンモニウムを造る事であり、その試みから始まった。馬の蹄の削り屑をもらい、徳利に入れて火で蒸すとアンモニアがとれる事はとれるが悪臭を発し、周囲の者から苦情が出た。そこで、船を借り川の上で逃げ回って仕事を続けたが不成功であった。製薬も試みた。製薬には徳利が必要で、塾生は酒屋から酒をとり、酒

を飲んで徳利を返さない事が続いた。酒屋が塾僕に聞いたところ、実験に使っていると聞き、酒を持って来なくなって困った。

d) 電氣の新知識を得る

洪庵は大阪の筑前屋敷に出入りしており筑前国黒田家の大阪での御出入り医師でもあった。黒田の殿様が江戸出府あるいは筑前への帰国のために大阪を通行する時には中の島の筑前屋敷に伺候し、ご機嫌を伺うのが常であった。安政3年か4年³⁾、筑前候黒田美濃守長濤が大阪を通る際に、洪庵は例の如く筑前屋敷に伺ったところ侯は一冊の原書を見せてくれた。そこで、洪庵は侯が大阪滞在の約三日の約束でその本を借りて来て塾生に見せた。それは、ワンダーベルトの物理書であった。福沢が音頭をとり、塾生総員が交代しながら二晩三日かかって最新の「ファラデーの電氣理論」が書いてある本末の「エレキトル」の部分を書し取った。写した枚数は100～150枚あったであろう^{1,7)}。後日、それによって電氣理論を学んだ。そこには、ファラデーの電氣説を土台にして電池の構造法（註：自伝による記載。製造法か？）などが出ていた。

e) 適塾時代の緒方洪庵による医療活動

洪庵は適塾では塾生に蘭学の学習を指導しながら医師として診療を続け、特に天然痘対策として種痘の普及、および、コレラの治療に大きく貢献した。天然痘の流行は日本の記録に残る最古のものは奈良時代の天平勝法7年（779）であるが、江戸時代では十数年ごと、19世紀に入っても数十年ごとに大流行があった⁷⁾。洪庵はやがて大阪に除痘館を発足させ天然痘の蔓延を防ぐ努力をすることになるが、そこに至るまでには日本における痘苗の獲得と選択に紆余曲折があった。古来日本では延享元年（1744）に中国から伝えられた人痘接種法が用いられていたが、天然痘になる危険性が高く不都合であった。文政6年（1822）にシーボルトはバタビアから牛痘苗を持参したが航海中に失活。牛痘法の技術だけを日本人に教授した。嘉永元年（1848）に蘭館医モーニッケが来日し、聴診器と牛痘漿を持参した。医師榎林宗建は通詞の子二名に接種したが変質していて善感しなかった。モーニッケはバタビアの医務局主任ボッシュに痘苗を要請し、嘉永2年（1849）に長崎に牛痘漿と牛痘痂がもたらされた。モーニッケが数人の子供に接種したところ、善感し、一人にはついた。これが日本における牛痘種痘の最初の例となった。ジェンナーが牛痘接種法に成功した寛政8年（1796）から約50年が経過していた。嘉永2年7月、長崎では江戸町のオランダ通詞会所を種痘所とし

て使用を開始した。この牛痘苗は半年の間に全国に普及した。10月16日には京都の除痘館に、11月7日には緒方洪庵と日野葛民、緒方郁蔵らが開設した大阪の除痘所に京都から分配された。日野はシーボルトの門下生、緒方郁蔵は洪庵と同じく坪井信道の門下であり、適塾開設時の塾長であった。大阪の除痘所は、はじめ大和屋喜兵衛の義侠によって別家大和屋伝兵衛の古手町の隠居所に開設されたが、やがて狭くなったので、万延元年（1860）高池屋清之助の協力により尼ヶ崎町に移動した¹⁾。洪庵は文久2年（1862）幕府の奥医師になるまでに、医者となって各藩に帰属していた門下生らを通じ、北陸、中部、四国、九州にわたる広範囲に分苗所を作り天然痘の蔓延を防いだ。洪庵訳「謨私篤牛痘説」という写本はジェンナーの種痘法について書かれたものである。コレラの流行は第一回は文政5年（1822）、第二回は安政5年（1858）であった。第二回の流行は、長崎に入港したアメリカ軍艦ミシシッピー号の乗員のコレラ患者から感染し、東に向かって流行し28万人が死んだ。この時も洪庵は献身的に診療に当たった。治療に関して蘭館医ヨハネス・L・C・ボンベが治療指針を公にしたが、洪庵は自分の治療体験からボンベの指針に満足せず、蘭語の原書からコレラに関する部分を翻訳し、自己の意見も加えて「虎狼痢治準」一卷100部を刊行し、参考のため医師達に配布した⁵³⁾。以上の活躍は牛痘苗を取得した嘉永2年（1849）から第二次コレラ流行の安政5年（1858）を経て幕府の奥医師となり江戸に出る文久2年（1862）までの期間であるから、安政2年（1855）に入塾し、同5年（1858）に江戸に呼ばれた福沢の適塾在塾期間とは重なっており、洪庵の活動を知っていたであろうが、自伝にもその記載はない。おそらく、診療助手としての参画もしていないであろう。福沢の在塾中のある時、道修町の薬種屋に丹波から熊が届いたとの事で、ある医者で紹介で後学のために解剖を拝見したいから誰か来て解剖してくれないかと塾に言って来た。塾生の数人は解剖に熱心で早速行ってやろうという事になった。自分は医者でないから行かぬが7～8人は行くと自伝に記しておられる。福沢は生理学の本をはじめ塾にある医学関係の本を充分に読んでいたが、医学系の実習や医療行為の実際については、物理学や理科系の実験ほどには積極的に参加する意志はなかったように思われる。後述するが、福沢は生来血液を見る事を大変嫌っていたので、その影響かもしれない。

f) 物理学への理解を深める

福沢が適塾で勉強した本は医学を中心とする自然科学諸分野に属する本であった。彼はここで、物理学、化学、解剖学、生理学を学び西洋学術の精妙さに驚嘆した^{33, 34)}。そして、緒方洪庵が黒田侯から借りたワンダーベルトの物理書を解説する事により電気をはじめ物理学の重要性の認識を深めたと言ってよいであろう。前記のような実験経験と西洋自然科学書の勉強を重ねた後、適塾の塾長であった彼は中津藩の藩令により、江戸の中津藩屋敷の中に蘭学塾を開くために江戸に呼ばれる事になる。安政5年、24才の時であった。この時点で彼は物理学を含む科学に対して十分な理解をしていたであろう。福沢の理解する物理学は次のように説明されている。「物理学とは天然の原則に基き、物の性質を明らかにし、その働きを察し、これを採ってもって人事の用に供する学にして自ら他の学問とは異なる。たとえば、経済学を例にとれば、それは天然の原則に依るものではない。経済商売に自由の主義あり(英国)、保護主義あり(亜国)これを聞けば両方に道理がある。そこで、経済学では、両国でその趣を異にすると云わざるをえない。物理はそうではなく、歴史の初め以来原理は古今同一である。神代の水は摂氏100度で沸騰し、明治年間の水も同じである。西洋の蒸気も東洋の蒸気もその膨張の力は変わらない。これらを物理の原則と言い、その原則を究めて利用する事を物理学と言う」(明治15年講演、49才)²⁾。福沢の念頭にあったのは、主として物理と化学であった。「理」と「数」、「証拠を求める」が彼が最も重きを置くところであった。「理」は合理的な論理、「数」は今日の哲学のようなもの。前記のように東洋の儒教主義に欠けているものは「有形において数理学と無形において独立心」を挙げている。文明または文明の精神と称するものはこれであったと解される。数理学とは科学一般、あるいは法則科学、精密科学というほどの意味に解せられる^{15, 27, 34)}。有形とは外から見てわかる文明の事物、たとえば衣服、食物、機械、住居などから政令、法律に至るもの、無形とはその文明を作っている文明の精神、あるいは人心や風俗などを指すと思われる。その上で、無形を十分に問わずに有形の文明だけを論じる事を批判している。学問の分野では無形の学問とは、心学、神学、理学などを指す。心学とは儒教などに基づく伝統的な道徳を指し、理学とは、今日の哲学のようなものを指していると思われる。いずれにしても、思弁的で目で見ただけではわかりそうな学問を指す。有形の学問とは天文、地理、物理(窮理

学)、化学などを指している。なお、福沢の時代の物理学などは、いずれも実証的で目で見てわかるものであった。この「数」、「理」および「独立」は知的な側面として数と理を、道徳的な事で独立を指しており、東洋に欠けている物として挙げているが、慶應義塾の創設時の教育方針であると明言している^{27, 40)}。そして、これからは物理学がただ工芸(技術、芸術)や産業分野を支配するのみならず人文・社会の分野も進歩して物事の道理が明らかになるにしたがい、当世では無形の政治、経済、社会現象なども数学や統計学を用いて遂には物理のなかに取り込まれるので物理学的考察が大切になると指摘されている⁵⁾。

g) 「訓蒙 窮理図解」を執筆

慶應義塾創始の慶應4年(1868、この年9月に元号は明治に変わる)に福沢は「訓蒙 窮理図解」(キンモウ キュウリズカイ)という本を出版した^{5, 40, 45, 54, 57)}。自らの学習経験が進んでからそれを踏まえて纏めてあり、日本では初めての科学読み物である。教育の中に自然科学的要素を取入れる意図の現れであったと思われる。「窮理」とは自然科学⁵⁾、あるいは広義の物理学⁴⁰⁾と説明されている。この本は次のような物理現象をわかりやすい図で説明している。三巻十章にわけられている。巻の一、第一章「温気の事」例、太陽熱、地熱、化学反応熱、膨張など、第二章「空気の事」例、空気圧、井戸ポンプ、気圧計など、巻の二、第三章「水の章」例、水圧、サイフォンなど、第四章「風の事」例、風圧、空気の温度差など、第五章「雲雨の事」例、風圧、洗濯物の日干し、富士山の笠雲など、第六章「雹、雪、霧、氷の事」の例、気化熱、氷の生成など、巻の三、第七章「引力の事」例、万有引力の存在、第八章「昼夜の別」例、地動説、地球の自転など、第九章「地球の公転と四季の別」、第十章「日蝕・月蝕」である。これらの現象につき日常生活の中で経験される事例を挙げながら自然現象の原理を理解しやすいように記載されている。たとえば、虫めがねで太陽の光を紙の一点に収束させると紙が燃える図、あるいは太陽(日輪と記載)と月および月の軌道と地球(世界と記載)との変動する相対的な位置関係を描いた日蝕および月蝕の説明図などである。出典は英米の物理書であるが、理解を容易にさせる説明は自身の発想による。以上の内容は自然現象の原因と結果が論理的に関係のある事を示すものであり物事の論理的考察が社会の啓蒙と教育とに欠かせない事を示唆している⁵⁾。ここで、「窮理」について考察してみる。福沢は幕末の時代に、今、必須の事は「古習の惑

溺」を一掃して西洋で行われている文明の精神を取り入れる事であると言っている。彼は、心のあり方が自由を欠いて一向になる事を感溺と呼んでいる。すなわち、既存の価値観や既成の思考パターンに捕らわれて、活発な知性の働きを欠いた固定的な態度を脱して、法則発見的な合理的思想の道である窮理の道を歩かなければならないと言っている³⁶⁾。宋の時代の儒学を代表する朱子学では道德教育を重視する一方、その知的教育においても特長がある。儒教では人間は教育と勉強により、理想像である聖人に必ずなる事が出来ると説き、その過程を示す。朱子が選んだ「大学」の中に八条目という言葉（一部前出）はその過程を示している。すなわち「格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下」である。格物とは物に格り（いたり）であり「物をきわめる事」、致知は知に至るの意味で「物の真理をきわめ、知識を得る事」である。全体として、人間は一步一步段階を踏んでなすべき事をきちんと行っていれば天下を治める事もなし得ると教えている。換言すれば、そうなる過程とは具体的な順序を踏んで、物について最高原理の理解に至る（理を窮める）ことである。彼らの言葉で言えば「窮理」である。儒学のこうした追求、段階的・論理的・因果律的推論の教示は、日本人を含む北部東洋人にとって、やがて、西欧の自然科学が流入した時、その自然科学的思考を理解出来る基盤となっていたのである。だからこそ物理学のことを、初期には「窮理学」とか「格学」とか「理学」と訳していたのである。朱子学が思考方法として主張した「格物致知」とか「窮理」は自然科学の因果律的思考に近い⁹⁾。

h) 物理学専攻への憧れ

福沢は明治26年（1893）、60才の時に「人生の楽事」と題して行った演説の中で次のように述べている。「自分は壮年の頃から今日に至るまで一日も忘れる事が無かったが、今日に至るまで果たす事が出来なかった事がある。自分は本来儒学生であったが40年前、年齢20才の頃洋学に志し、その入門としては適塾において物理学の修得があった。自分はこの学問に大変に感激し、この科を専門に修めようと思った。しかし乍ら家に資力無く、開国以来の世変を黙視する事が出来ず、著述などをして時間を費やしたが、物理学の事は心頭を離れなかった。造化の秘密は人間が探究しないから秘密なので、それを解明したいと思った」。すなわち、外交、政治、教育、時事問題に取り組んだ彼の心中には物理学に打ち込みたかったという悲痛なまでの願望があった^{45, 60)}。

i) 自然科学修得後の漢学・儒学観

福沢は幼少時より漢学・儒学を学び、儒教の倫理、道德、礼儀を学び取り、自分の教養の基礎は儒学であると言い、その素養は浅くないものがあつた。しかし、前述したように、儒教の治國平天下という政治性と階級性を嫌っての厳しい批判をしていた。物理学をはじめとする自然科学を修めた後、従来の漢学者・儒学者の学問が迂遠不精密で耐え難いものに見えた。後年の事であるが、儒者が様々な自然現象を見ながら、これらを支配する因果の理法を探究しようとしないうえに、後年を責めて、次のように言っている。「儒者は地獄・極楽の仏説を証拠のないものと排撃しながら、自分達は数百年の間、降雨の理由すら推究した者はいない。雨は天より降る、あるいは、雲凝りて雨となると言うのみで、蒸発の理（註：合理的なもの）と数（註：実証的なもの）に至ってはその証拠を求める事を知らなかった。朝夕に水を用いてその剛軟を論じながらその水は何物の集まりで形を成したものか、また、その水中に何物を混じ、あるいは何物を除去すれば剛水となり、あるいは軟水となるかの証拠を求めていない」^{2, 34, 35, 58)}。

j) 福沢における人文科学と自然科学の理解

本誌の目的は医学所および医学部の設立の背景に福沢の自然科学重視の思考がある事の由来を解明する事であるが、慶應義塾は初め人文科学系として発足した。漢学、蘭学から英語と学び、西洋文化の摂取により日本社会の啓蒙を目指した福沢における人文科学の自然科学的理解に触れておく。西洋自然科学の精密・微妙な事に驚嘆し物理化学に傾倒した彼は、次いで英（米）書によって西洋の人文科学を知った。自然科学によって知り得た世界は厳格普遍的な法則の支配する世界であつた。さらに西洋人文科学は彼に東洋のそれとは全く異なった経済論、道德論が成立している事を教えた。人文科学の中で最も法則的なものは経済学であり、福沢が文久二年（1862）にイギリスで購入し、その一部を翻訳したチャンバー書店版「学校用及び私修用経済学」は、極めて素朴に自然界にて行われている法則が人間の経済生活をも支配する事を認めている。すでに、自然界には法則の支配がある事を知り、「理」「数」「証拠」を重んずる事を痛感していた福沢にとって、社会人事も動かす事の出来ない定則の支配を受けるとのこの説は大きな魅惑であつたであろう^{33, 34)}。次に明治2年（1869）アメリカから持ち帰ったウエイランドの経済書を江戸城の方向に砲声を聞きながらでも講義をするが、これについて自然科学的定則との関係を記した文献は見当たらない。福沢の自然科学観につい

ては、結論として次のように纏められる。彼は自然科学の業績に感嘆し、その進歩を信頼し、社会事物の考察においても、これに倣おうとする傾向が強かった。これは二つの点で現れる。一つは、社会的事物を考察するに当たり政治的、宗教的、道徳的の如何を問わず、その可否を言う前に先ずあるがままの実相を直視する。二つは、社会的事物、さらにその歴史的変動に、もし出来れば法則を求めようとする。この意味における科学主義は著書全体を貫いている³⁴⁾。

II. 慶應義塾医学所の創設

以上、福沢の自然科学教育の重視に至る思考の経過を辿って来たが、いよいよそれが有形化され、明治6年(1873)に慶應義塾医学所が創設された。細部に入る前に、当時の医学環境について述べる。

1. 明治維新後の医育機関の状況

a) 長崎医学校

官学の系譜として維新後最初に発足した。長崎医学校は徳川時代にペリー来航を初めとし諸外国の船や軍艦が続いて日本に来た時に幕府は対外防衛策としてオランダに依頼して海軍の軍事伝習所を作った。その伝習所の医療部門として軍艦医養成目的のための長崎医学伝習所の系譜である。オランダ医師ボンベ主導、日本側責任者は松本良順(奥医師、佐倉順天堂創始者佐藤泰然の実子)と佐藤尚中(泰然の継子)であった。明治維新後は幕府の担当者は去り、長与専斎(大村藩医、福沢の親友、適塾で福沢の次の塾長)が学頭に選ばれ、オランダ医師マンスフェルド、長崎裁判所総督沢宣嘉、同判事井上聞多などの助力により明治元年(1868)10月に長崎医学校を興した。予科と本科で通算5年制であった。

b) 東京医学校(大学東校)

旧幕府の医学所を接收し、明治元年7月に横浜の軍陣病院を下谷の藤堂屋敷に移し「大病院」としていたものである。明治2年、佐倉順天堂塾一門(佐藤尚中門下)の岩佐純(福井藩士)と相良知安(佐賀藩士)が医学校取調御用掛に任命され医学校の今後の方針・計画作成を担当していた。維新政府は相良などの進言によりドイツ(プロシャ)医学を日本医学の範とする方針を建て、明治2年にドイツ人教師(医師)二人の招聘を決めた。来日までの期間、英国公使館付武官ウイリスやシッドルの協力を得て大学東校規則の作成準備を行っていた。東京医学校は函館戦争負傷者の救援

までを任務としていたため、医学校としての設営・準備は長崎、大阪に比して著しく遅れた。加えて、相次ぐ所管変え、英蘭両国による主導権争い、皇漢学派との争いもあり、正則(洋書を読み、学科の順序を逐い、卒業大成する)5年制、変則(翻訳書により每学科の要領を得、早く成業する)3年制よりなる大学東校規則を定めたのは明治3年10月であった。明治4年7月にプロシャ医師二人ミュルレル(陸軍上等軍医正)とホフマン(海軍軍医正)が着任。同年9月に東京医学校を一旦閉鎖し、学生に一般試験を行い59人のみ合格。医制を改編し大学を予科3年(後に2年に変更)、本科5年の8年制とした。加えて、従来医学教育の本流としてきた邦語による変則医学教育制度(前記)を廃止し、また、国内数か所に大学区を設けて官立の大学を設置し、国の政策の一環として広く医療・医学を推進する方針を否定して、東京医学校をドイツ語による少数特権エリートの教育機関にするなど、今まで尚中達が築き上げて来た制度を大きく変更した。さらに患者数制限、初診料徴取など医制の変更のみではなく、学制にまで関与し、初等教育の重視、師範学校および外国語学校優先などを建議した。維新以後、東京医学校に登用され医制創建の任に当たってきた順天堂塾一派(佐藤尚中、岩佐純、相良知安など)はドイツ医師の影響を強く受けた維新政府との間に矛盾を深め逐次東京医学校を追われた。これらの学制の改革に当たっていたのは大木喬任文部卿である。大木は学制改革の建議の中で「我が国には我が国の文学、言語、風俗、学問がある。しかし、我が国に乏しいのは百般の工芸、技術および天文、窮理、医療、法律、経済などであり、これらのものは欧米諸国が遥かに優れていて我が国にない事実である。今これらの事実を習得するには、外国人について外国語で学ばなければならぬ。そして、その目的を達した後、邦人が邦語をもって邦人に相伝する事が出来る」と述べている。これは、明治という時代精神でもあり、部分的には福沢の観点と共通する内容もあるが、明治の志士官僚大木の場合には欧化と日本国家の富強とが極めて楽観的にかつ直線的に結びつけられているわけで、大木の欧化主義は国権主義の一変種とも言い得るものであった¹³⁾。長崎医学校および東京医学校に次いで慶應医学所創設以前に設立されていた医学教育機関は次のような機関である。

c) 長崎・東京に次ぐ官立医学校

大阪医学校(明治3年創設、雇用外人教師は蘭人)、高知藩医学校(明治4年、蘭人)、熊本医学校兼病院(古城医学校、明治4年、蘭人)、官立函館医学校(開

拓使、函館医学所、明治3年、米人）、国立札幌病院（開拓使、明治2年、米人）、軍関係では陸軍軍医寮本病院（兵部省、東京、明治3年、蘭人）、海軍本病院（兵部省、東京、明治3年、英人）。

d) 公立医学校・病院

学校兼病院（鹿児島、明治2年、英人）、県立好生館病院（佐賀、明治2年、米人）、県立神戸病院（明治2年、米人）、新潟共立病院（明治3年、仏人）、医学館・大病院（岡山、明治3年、蘭人）、金沢県医学館・病院（金沢、明治3年、蘭人）、京都府療病院（明治5年、英国籍独人、京都府立医科大学の前身）、病院（医学講習所を併置、名古屋の西本願寺別院内、明治5年、米人、名古屋大学医学部医学部の前身）、大阪府病院（明治6年2月、大阪大学医学部の前身、蘭人、伴って大阪医学校は一ヶ月後に閉鎖）、東京府病院（教場、明治6年5月、英人）。

e) 私立診療医育機関

順天堂病院（佐藤尚中開設、下谷練堀町、明治6年2月、塾生を置き医育も行う初の私立病院）。東京医学校の計画に参画していた佐藤尚中は医学校を去った。それまでの尚中の方針は医を維新後の国政の柱として仁慈を普及し商売たる医を止めることであった。明治5年9月、共に大学東校を辞した数人の同志と博愛舎を起し診療を行った処、意外の盛況でありこれが下谷練堀町の順天堂病院の開院の動機となり、やがては明治8年の湯島順天堂病院設立に連なった^{12, 13, 31)}。

2. 慶應義塾医学所創設とその動機

明治維新後6年間に上記のような医制の変化や病院医学校の発足が見られたが、私立では下谷の順天堂病院のみであった状況の下で、同じ明治6年の10月に慶應義塾医学所が創設された。その動機については互いに僅かに内容の異なる四種の記載がある⁴⁵⁾。

a) その1

松山棟庵（医学所校長）著、義塾懐旧談、三田評論第235号、大正6年3月刊 によると次の通りである。『明治6年5月頃先生の家の台所にて、先生と立乍ら雑談中、先生曰く「塾にて英文の医学校を建てる所存であるが、自分は資金を給するから、足下は時間を与えられては如何」と。小生大いに同情を表せり。此時先生の傍らに立聞きして居たる前田政四郎を捉え「足下宜しく医学に従事し医者となるべし、どうか」と云われた。前田氏直ちに之を承諾せり。先生笑い乍ら曰く「今即座に先生と弟子が出来た。明日からでも始められる」と手取早く相談が纏まった。是れ即ち慶

應義塾医学所の発端なり。夫より小生丸善書店に命じ理化学書、解剖生理、内外科書を取寄せ開校の準備をなす。一方本塾の北側に在りし明地を選び、至急に塾舎の建築を始めた』。

b) その2

松山棟庵は「福沢先生を語る諸名士の直話」（箒庵高橋義雄編、岩波書店、昭和9年）の中で次のように述べている。『最初この医学所を設けんとする時、紀州で騎兵をしていた前田政四郎という者が参り合わせ医学をやろうという事を申し出ますと先生は例の活発な流儀で「先生が松山で弟子が君であれば学校は出来るではないか。直ちに始めるが良い」と言われた』。以下前文と同じ。

c) その3

やや異なる記載がある。『或日、前田政四郎が先生の所に来て「私はこれからドイツ語をやりたい」というので、先生は「なんの為にドイツ語をやるのか」と聞かれると「医者になりたいからです」と答えた。先生は「医学を学ぶのはドイツ語に及ばない。塾でも医学の修業が出来よう様にしよう」とて直ちに邸内に住んでいた松山棟庵を呼び寄せられた。松山が急いで来ると、先生は台所前の内庭で前田と立ち話をして居られたが松山に向かって「前田さんが医学をやりたいと言うが、塾で医学校を開いたらどうだろう」と言われたので松山は「それは面白いでしょう。やってみよう」と答えると「それでは私が出して塾舎を作るからあなたは時間を出して教えてくれ。ここに松山という教師があり前田という生徒があり、それで塾舎が出来れば医学校はすぐ開ける」と言われた』。以下（a）と同じ^{6, 23, 25, 30)}。

d) その4

異なる趣の記載。『或日、前田政四郎が先生に向かって、医者になるために義塾を去ってドイツ語を学びたいと思っている旨述べたところ、先生はそれはドイツ語に限ったことではないから、塾でも医学の修業の出来るやうにしようと言われ、直ちに邸内に住んでいた松山棟庵を呼んで相談された』。以下（a, b, c）と同じ^{24, 26)}。かくして東京府知事大久保一翁宛願書を出し設立を見た。

（註） 1. 松山棟庵：慶應2年鉄砲洲の福沢塾に入塾。紀州高野山の寺領安楽川荘の出身。京都に出て新宮涼民について蘭方医学を学び、一度和歌山に帰って開業。その後江戸に出るが船中で福沢と同時期に適塾で学んだ山口良蔵に会い、勧められて慶應2年福沢塾に入塾し英語を学ぶ。明治元年1月より6ヶ月間、横浜在留の米国医師ヘボンに師事す。明治2年2月より3年

12月まで紀州和歌山で医に従事。福沢がアメリカから持ち帰ったフリントの内科書の一部を翻訳して出版。日本の英語医学書翻訳書第一号である。明治4年大学東校に出仕し大助教授となる。三田の塾内に住み翻訳などに従事。義塾医学所創設に際し所長となる²⁵⁾。

2. 前田政四郎：紀州藩の騎兵である。福沢塾に入り、後の小田急電鉄社長草郷清四郎と共に福沢に乘馬を教えながら英語を学ぶ。後の陸軍一等軍医。日清、日露の戦いで活躍し金鵄勲章受章³⁰⁾。

3. ヘボン：米国プリンストン大学卒業後ペンシルヴァニア大学医学部を卒業。フィラデルフィアで医師として活動。ニューヨークで13年間病院勤務の後、安政6年(1859)長老会宣教師として来日。布教と無料施療に従事。神奈川に施療所を作り診療。文久2年(1862)生麦事件で負傷したイギリス人を治療。慶應2年(1866)ヘボン式ローマ字を作り普及に努力。歌舞伎俳優沢村田之助の脱疽手術の後日本最初の義足を着用せしむ。横浜に居住し、夫妻で英語教育と宣教を行ったヘボン塾は後のフェリス女学院、明治学院の発祥となった。ヘボンの点眼薬は著効あり当時、中国の上海まで輸出された¹³⁾。J. C. Hepburn が名前であるが英語読みはヘップバーンである。当時の日本人は外国語に馴染まず、つまってヘボンとなった^{31, 32)}と記載されているが、オランダ語読みにするとヘボンであるとも言われる(東忠尚塾員談)。

3. 医学所の構成

主要人事としては、松山棟庵が校長、新宮涼園と杉田武の両氏を教師兼監事として発足。後に医学所出身者の中から教員が出る。塾舎は福沢出資の三千円で現在の塾監局の後方の位置に建設。別に、三田通り沿いに杉田玄瑞を主任として診療所「尊生舎」を設ける^{26, 30, 45)}。

(註) 1. 新宮涼園：新宮涼介(松山棟庵の実兄)の長男。幼時泉州岸和田藩儒相馬逸郎より漢学を学ぶ。慶應2年より京都の岩佐純に蘭学および医学を学び、傍ら西周において英語研究。明治2年より和歌山において叔父棟庵について英語医術を学ぶ。明治3年慶應義塾に入ったが、すぐに大学東校に転校。学則変更になり英語を廃してドイツ語を用いる事になったため退校。明治5年、横浜十全病院にて米医シモンズにつき医術研究中、慶應義塾医学所創設につき赴任。明治8年父涼介死亡し一時京都に帰り京都府療病院に勤務。翌年、上京し慶應義塾医学所教授。後に芝区医師会長、内務省衛生局判任御用係などを歴任。

2. 杉田 武：杉田玄端の次男。明治4年大学中得業生拝命。8年文部少助教拝命その後、東京医学校本科生となるも、学制変更となり退学して慶應義塾医学所に通学。医学所教員となる。一時渡米、後医学所に務む。後に海軍少軍医。

3. 杉田玄瑞：旧名吉野徳太郎、尾藩医師子弟。杉田立郷の門に入り医術を修む。天保9年立郷の子成郷の義弟となり、杉田玄瑞と名乗り、弘化8年、本家の杉田白玄の継子となる。その後、洋書調所教授となり福沢と共に生麦事件の際の英国公使からの抗議文を翻訳。開成所教

授、外国奉行支配翻訳御用頭取。明治維新の後、明治政府への仕官を断り、徳川家の後を追ひ駿府にて陸軍軍医学校教授。陸軍付属医師頭取となり沼津兵学校付属病院勤務中に勝海舟より海軍または宮内省に勤務する事を勧められるが福沢に相談の上断り、東京に帰着。福沢方に寄留し、開業準備。三田通りに適当な家を見付け診療所として「尊生舎」と名付け、松山棟庵と経営。慶應義塾医学所の生徒の実地指導に当たる。明治8年神田に診療所を設け同じく尊生舎と名付け死ぬまで診療に従事す。後に学士院会員。三田の尊生舎は尊生堂病院となり松山棟庵が引き受けて経営。後の松山病院となる^{20, 27)}。

4. 医学所の学事

英語の原書をもって医学を教える方針である。創設時の慶應義塾医学所規則類による学科および課程を知るために、当時の規定のままを記載すると次の通り^{19, 20, 24, 26)}。

予科

三等予科「素読」	(稽古三時間)	
単語篇	窮理初步	文典
二等予科「素読・講義」	(同)	
博物学	化学初步	万邦史
一等予科「講義・暗誦」	(同)	
理学書	化学書	算学初步

本科

五等本科「講義・暗誦」	(同)	
解剖学	健全学	実際算学
組織学	生理学	
四等本科「講義・暗誦」	(同)	
薬剂学	外科学	代数初步
	産科学	
三等本科「(講義)(暗誦)」	(同)	
内科学		
臨床医学	病理学	幾何学
二等本科「講義」	(同)	
察病学	衛生学	精神生理
一等本科「講義」	(同)	
包帯学		
顕微鏡学	断訟医学	医史

要約すれば、理学と化学の二科を予科とし、解剖学、生理学、薬物学、内科学、外科学、産科学の六科を本科とす。以上二年をもって卒業す。稽古時間は毎日二時間とし、生徒は毎日二科目の講義を聴聞す。ただし一科目の講義時間を一時間とする¹⁹⁾。初学の者には予科に入る前に文典の素読および理化学初步など読みやすい書を約六ヶ月間講義する。

学則はその後4回改正されている。第一回は明治7年6月で文章上の小変更のみ。第二回は明治8年9月で、解体、生理、薬剤、産科、外科、内科の六科にハルツホルン（註）の教科書を用いる事を学則に記す。第三回は明治9年1月で、予科の化学にもハルツホルンの教科書を用いる事を指定。「ハルツホルン七科書」全部を指定した事になる。第四回は明治9年12月で、本科を五期とし、予科を三期とし、各一期は5ヶ月とする。明治3年10月に制定された「大学東校規則」では予科3年、本科4年で計7年である事および教科書・参考書は慶應義塾医学所では英米の原著であるが大学東校ではドイツ語の翻訳書をも用いた事が医学所の規則と異なる。しかし、その他の大部分は大学東校のものと同じであり、それに倣って作られたものと思われる。その筈で、松山棟庵は明治4年頃大学東校で大助教授であったし、新宮涼園と杉田 武両名は大学東校で学んだ者であった。

（註）ヘンリ・ハルツホルン：1853年アメリカ最古のペンシルバニア大学医学部の教授になった。1866年、同大学初の衛生学教授に就任。主要著書に *Essential of Principle and Practice of Medicine*（初版1867）、*A Conspectus of Medical Sciences*（1869）、*Memo-randa Medica*（1868）がある。いずれも実用的簡易医学書として、同じフィラデルフィアのジェファソン医科大学のグロス（S. D. Gross）の名著 *A System of Surgery*（1859）と共に明治初期の日本医学に大きな影響を与えた。特に、明治9年1月に医術開業試験が施行され医科七科の試験が課されてからは、ハルツホルン著 *A Conspectus of Medical Sciences* の翻訳書「七科約説」（太田周成など、明治11年）は広く利用された。

慶應義塾医学所の教育はペンシルバニア大学医学部系医師の書いた教科書を中心に、 그레이（解剖学）やタンネル（外科学）などの英国系医師の書いた教科書を加えて行われた内容であった。また、校長の松山棟庵が師事したヘボンがペンシルバニア大学医学部の出身であった事も考慮に入れると、医学所での教育は独立後約100年を経過したアメリカの東部の医学教育を模したものであったであろうと思われる¹⁹⁾。

講義の方法は100人もの生徒に講堂で講義をするのではなく、個人教育のようなものであった。生徒一人一人の程度が異なっているからであった。教師は一人の生徒の前に行き前日の復習をする。前日の内容を聞き、暗誦するのを聞く。それで、前日のところまで理解している事を確かめると、次の頁を教師が読んでその内容を話してやる。このようにして一定のところまで読むと、今度は教師や生徒が多数いる前で試験を行う。すなわち、原書を出してある頁を開き、ここからここまで書いてある内容を聞く。以上は医学所出身で松山棟庵の甥の松山

誠二談である。なお、生徒数は明治7年は数十人、明治8年はおそらく最も多く百人以上であった^{12, 13, 19)}。この方法は原書を読んでその意味を理解するための方法であり、このような洋書会読法は日本の洋学教育の伝統的方法であったが、当時のアメリカの医学教育もこのようなものであったと言われる。アメリカの場合は西部と南部の開拓が進み、急激な人口膨張の中での医療の必要性から修業年限2年程度の私立医学校の乱立が起こっている。そこでも会読方式の教育が行われた。この種の医学校の質は低くやがては漸次減少する。元々英米の医学教育はスコラの大学教育の埒外にあり、病院での徒弟的実地教育を特長としていたから、医学校はむしろ、そのための予備課程とみなされる傾向にあった¹³⁾。日本の場合の私学の出来方は、官学は学事を重んじ、臨床の実地面に力を注がないので市民が困りその対応に私学が創設された経過があるので、2年の修業年限や会読中心の教育法は似ているが、アメリカの場合とは事情は異なるという事になろう。

臨床の実地は、医者の子息は親に習い、通学生は医者の子の代診生となり、塾にいる者は前述の尊生舎などで傍觀生となって修業を行った。臨床担当の教師は松山棟庵と隈川宗悦（医学所卒業生）の他に英米の宣教師で医者である者数人であった。築地病院の医師フォールスや隈川宅に横浜から出張して来るセメンズなどである。セメンズは福沢とも親しく、後に三田の塾内に居住していた。萬来舎である²⁰⁾。

明治維新後の日本の官界にはドイツ崇拝の気風があり、特に、医学はドイツに限るとしドイツ人教師を雇い入れ、留学生をドイツに派遣する傾向が強かった²⁰⁾。明治3～4年にかけて学制が変わり、それまで英語を採用していた大学東校はドイツ語を用いる制度となった。福沢は、英語は世界中どこでも通用するから医学も英語による事を決め、英米医学を選んだ。あちらがドイツ語ならこちらは英語だという機運もあった。また、慶應義塾という英語塾に付属して出来た医学所であるので、ドイツ医学勃興の時代に英語によって医学を学んだとしても何ら不自然ではないとの判断もあった¹⁹⁾。明治維新直後、東京医学校での教育計画を担当していた佐藤尚中門下の相良知安などが蘭人医師フルベッキの提言を聞いて明治政府にドイツ医学採用を提案している時に、福沢は横浜開港時の経験と三度の外遊時の体験から世界の流通語は英語である事を知っておられたし、幕末の医学界の主流は英国医学に傾いていたので、「医学の範をドイツに採るがごときは人の子を毒するものだ」とドイツ医学採用に反対の意見を持っていた（梶田 昭、医学の歴史、講談社、

2003年)。事実、日本の多くの医学校がドイツ語を用いるようになったのは明治14年頃からである⁶¹⁾。明治初期から中期にかけて、医学や医師に対する言葉として「日本橋から南にドイツ風吹かず」という言葉が話された。医学にはドイツ医学だけではなく、イギリス医学もアメリカ医学もあるのだぞという意味をこめてこのような風刺言葉が人々の口の端にのぼった。日本橋から南とは京橋、銀座、芝方面、横浜方面で、その方向には私立医学校、私立病院(イギリス医学)、歯科医(アメリカ人)があり、京橋には成医会講習所、海軍病院(イギリス系)などがあった。日本橋から北とは神田、本郷から戸山が原にかけての地域を指す。その方向には、東京医学校、陸軍省軍医部、軍医学校などがあった^{31, 32)}。

5. 医学所設置の背景

直接の原因は、福沢邸の台所の庭における福沢と松山棟庵との立話、あるいは前田政四郎の医学志望の申し出であろうが、その背景は多様である。

a) 西洋医学への期待

福沢の思考の中には、社会の文化を進め済生救命の道を全うするには西洋流の医学を普及せしめねばならぬ。医術は洋流に則らなければならないのに、日本の文化はいまだ日が浅く、洋方医学を教授する学校は大学東校くらいしかない。これでは不都合だから西洋医学を少年医生に教授して我が文化の進歩を補う、という考えがある。当時は殆どが漢方医であった。福沢は漢方医術をただ排斥するばかりではなく、従来の漢方にとって代わるべき西洋医学の普及に心掛け、その一手段として慶應義塾に医学校を付属されたいと思っていたのであろう。また、一口に西洋と言っても、西洋の中で英米の文明をとる事も明言していた^{6, 20, 27, 30)}。適塾の環境の然らしめる処であろうか、自ら医学に関心を持つようになっていた。

b) 事前の西医養成

差し当たっての障害である漢学主義に伴う漢方医術を打倒せねばならぬ決心を早くから持っていた。そのためか、慶應義塾では開塾の当初から幾人かの洋医を養成し、後に名を成した者もいる。足立寛(鉄砲洲時代入塾、後に緒方塾に学ぶ、陸軍軍医総監)、印東玄得(慶應3年入塾、大学東校に移り、後に医科大学教授)および近藤良薫(明治元年入塾、横浜の十全病院長)など。福沢本来の科学教育尊重の精神からも医学所設立は当然とうなずける。

c) 義塾発展の機運

義塾は明治4年(1871)に三田に移り、いよいよ

諸事発展の機運に向い、各方面に進出して学風の伸長を期そうとする時期であった²⁶⁾。

d) 長与専斎の動向

盟友長与専斎が明治6年6月より文部省医務局長に就任し開設許可の見通しが得られた^{12, 13)}。

e) 私立医育機関待望の状況

中央の官立医学校がプロシヤ陸軍軍医学校を模して官医、学医の養成機関として定着して行くにつれ、国の医療行政からはみ出てくる「四方疾病に苦しむ人々」のために市中の病院として「専ら諸人の疾病を治療する事を企てる」私立病院が生まれ、かつ官立から締め出された多くの医学書生のために「皇朝の文(註:邦文)を以て教える」私立医学校が簇生して来る時代でもあった¹³⁾。

6. 本塾との関係

医学所は慶應義塾の名を冠しており、当然同社とみなしてよい筈であるが、学科などの問題になると本塾とは互いに関係は薄く、教育体制などは学長の自由裁量に任せていた。一度決めたら責任者に任す福沢独特の方法であった。したがって、義塾の一分科ではあるが、自ら一種の分校をなしていて、一面、松山棟庵の私塾のような感がなきにしもあらずであった。本塾の支社たる態をなさず、本塾との出入りについても、改めて手続きが必要であった^{19, 24, 26)}。

7. 特筆すべき点

開校当時、東京日日新聞551号に掲載された生徒募集広告に次のような文がある。「此度社中申合せ本塾の傍に医学所を設けたり。有志の子女は来たり学ぶべし」。実際に女性の志願者があったか否か不明であり、少なくとも女性の入学者はなかったようであるが当時としては注目すべき事であった。明治6年は福沢が「明六雑誌」を興し明治啓蒙主義思想の旗揚げをした年である。米国でも女性の医師への道は茨の道であった。それでも1850年にペンシルバニア医科大学の提携校として世界で初めてのペンシルバニア女子医科大学が創設されている。医学所がフィラデルフィアの医学担当者面々の意志をモデルとしたのか否か不明だがこの広告文は啓蒙主義思想家としての福沢の面目を伺わせるものである^{13, 26)}。この思想を引いているのであろうか大正6年の慶應義塾大学医学科の創設にあたっては女子学生3名の応募があったという。参考までに述べると、日本では女性に医術開業試験受験の道が開けたのは、明治17年である。公許女医第一号は荻野吟子(明治18年上記試験合格)であ

り高階経徳の好寿医院出身。済生学舎（明治9年、長谷川 泰開舎）も明治17年より女性に門を開いた。鷺山弥生（後の吉岡弥生）が明治22年に同舎に入った時には、16人の女子学生がいたという¹³⁾。

8. 明治13年廃校

その理由には次の諸事項が挙げられる。

a) 経営の困難

医学教育も漸く精密を要し、御遺体の収集、莫大な機器の購入、診療病院の充実などに多額な経費が必要であり、私立にはおよばぬ費用を要するようになってきた。

b) 専任教員人事不安定

教育に従事する医師も止むをえぬ事情あり専任する事が出来なくなってきた。松山棟庵は事務多端のため、校務一切の摂理を新宮涼園に依頼して校長を辞任した。多忙の理由は明治8年東京医学会社を興し、また、杉田玄瑞と共同で経営していた尊生堂医院より杉田が手を引き神田に出張所を作り開業したため、一人で診療と生徒の教育とを行わねばならなくなった。この時、算数の教員を入れ、また、阪倉金次郎という洋行帰りの教師が精神生理を受け持ったが、共に長続きしなかった。明治11年新宮涼園、沖野嘉太郎は開業、前者は後に内務省に勤務、後者は間もなく病気で死亡した。そこで再び松山棟庵に校務を依頼し、さらに、三名の教員を採用した。内二名は医学所出身者であった。明治11年11月には上記三名も開業し、杉田武は海軍少将となって転出した。明治10年に西南戦争が起り、関係ある藩の士族の塾生はほとんど帰国して生徒数は激減した。このために塾は経営上大危機に面し、教師に支払う給料も十分な事は出来なかった。なお、西南戦争は廃刀令公布や俸祿の停止などに対する不平士族が鹿児島を中心に反政府の勢力となって兵を挙げたもので、戊辰戦争以来の大きな内乱となり8ヶ月続いた（詳説 日本史研究、五味文彦等著、2005、山川出版社）。

c) 医学校増加

英語医学の大阪専門学校医学科（明治12年設立、英人解剖学教師フレーザー招聘）など各地に官公立の医学校や病院がおいおい出来、私立の済生学舎（佐藤尚中門下の長谷川 泰主催、ドイツ医学）も出来たので、無理算段して私立の医学校を維持するにもおよばなくなったと判断された。

d) 卒業生教員の寡少

医学所が作られた目的は、元来は臨床医家養成にあっ

たため、出身者は主に開業し、せめても、時の医学界に名を成す者が出ればまだしも、医学所に残り、長く教鞭をとる者は僅かであった。

e) 医術開業試験

加えて、医学所を卒業しただけでは直ちに診療する事は出来ず、改めて医術開業試験を受けなければならなくなった。また、ドイツ医学主体の試験であり英語医学を学んだ者が通過するには容易なものではなかった。以上の理由で入学する者は益々少なくなった。かくして、明治6年（1873）10月に開校した医学所は明治13年（1880）6月に廃校となった。足掛け8年、満6年6ヶ月の後に廃された。

f) 廃校の事後処理など

医学所にあった物は全部売り払われ、得た800万円は慶應義塾に寄付された。松山棟庵、隈川宗悦などの関係者は後に志を合わせ、高木兼寛らと成医会講習所を作り後の慈恵会医院の基を作った。すなわち、医学所の学風は後の医学科には受け継がれず、慈恵会医科大学に伝わっている事になる。医学所の校舎は三田英学校が借りる事になった。同校は予備部門志願者のための予備校であり矢野文雄・武雄兄弟の創立による。後に愛宕下を経て神田に移り錦城学校となった^{13, 19, 26, 30, 45)}。

III. 医学部の創設

1. 医学所廃校後の状況

科学教育の必要性を重視し、その一環として実現された慶應義塾医学所が上記の諸種の理由で心ならずも廃校になり、福沢は医学所の継続不可能を遺憾とする発言をしている¹⁰⁾。ドイツで目覚ましい研究業績をあげて明治25年に帰国し、福沢の支援により伝染病研究所（私立と国立）、土筆ヶ岡養生園において研究・診療に活躍し、その結果、北里研究所を創設していた北里柴三郎は、福沢に何度か医学部の開設を勧めたが財政上の理由から受け入れられなかった。また明治26年3月15日付け松山棟庵宛の福沢の書簡に、「拙宅にて医友の小集相催し度に付ては、同日午後五時半より御命籠相願度、長与、北里諸氏へも案内致し置き候義、以下省略」との内容のものがあつた。そのメンバーからすれば、当然義塾における医学教育が話題であつたであらうと推察される^{4, 62)}。土筆ヶ岡養生園は、もとの福沢の私有地にあり三田の本宅から別荘まで比較的近く、しばしば養生園に寄せられたそうで、おそらく北里とは医学部の件につき話しあわれる機会が多かつたであらう（田端重晟日記、北里研究所

北里柴三郎記念室)。北里はその後も塾関係者に医学部設置の提案をしたが受け入れられなかった。医学所は廃止になったが実学を重んじ、医学や工学の教育に寄せる福沢の志は一生変わらなかったが、自然科学系学部の創立を見ることなく明治34年(1901)2月3日に逝去された。

2. 理科系学科増設の動き

この動きについては、慶應義塾七五年誌(昭和7年)、慶應義塾百年誌(中巻, 前, 昭和35年, 同別冊大学編, 昭和37年)、慶應義塾大学医学部十周年記念誌(昭和6年)、同二十周年記念誌(昭和15年)および同六十年周年記念誌(昭和58年)に記載があるが、特に、医学部二十年記念誌、同六十年記念誌および慶應義塾百年誌に詳しい。ここでは要約して述べる。義塾では明治23年に大学部が出来、理財、法律、文学の各科を置き、31年に政治学科を加えたが、これら無形の学問のみをもって甘んずるものではなく、有形科学の学科も併置して完全な総合大学にしたいとは、多年来の希望であった。明治35年11月15日に開かれた評議員会では、「大学部に機械、土木、化学、医学の各学科中より1~2科を選択して新分科を増設すべし」との新学科増設建議案が可決され調査委員会を設けて調査研究する事になった。委員三名は波多野承五郎、日原昌道、石河幹明である。委員会は、理学、化学、工学、医学の4学科の中から適当なものを選んで新設するとの結論を出した。これを受けて、新学科調査委員会が出来、鎌田栄吉、石河幹明、波多野承五郎の三人で研究の結果、工学科の方向に進む事になり、さらに二名の委員(阿部泰哉、永井好信)を加えて検討した結果、工学部増設には多額の費用を要し義塾の財政では不可能であるとの結論に達し、この増設案は廃案となった(明治37年2月、第6期、第19回評議委員会)。2年後の明治39年(1906)、義塾創立50年を迎えて記念事業が計画され、この時にも工学科増設の説が出たが、必要な資金が集まりそうにないという事で図書館を建設する事になった。しかし、資金を募集してみると15万円程度を予想していたところ、35万円の応募額が出来た。そこで図書館を木造にすれば10万円で足りるから、後の25万円で工科を増設したらどうかとの説も出たが、結局その説は実現しなかった。その後、工科増設の話は再三繰り替えされたが、中々進まなかった。ところが、大正3年(1914)、第一次世界大戦勃発し、商工業界は未曾有の好景気となった。大正6年、慶應義塾は創立60周年を迎える事となったが、これより先、大正4年の末頃から再び理科系教育を始めようと

の機運が起こり、評議員会でも新設の論議が頻繁に行われるようになった。そして「有形科学」の学科を設置して総合大学を目指すべし、という声が強くなった。この時は理学科、工学科および医学科のいずれか一学科を増設しようという計画であった。義塾出身者は実業家が多く、中でも銀行や商事会社に偏している趣があり技術者を持たない憾みが感じられていたから理工科新設論が高かった。当時の塾長である鎌田栄吉は塾監局幹事石田新太郎と共に、塾の評議員達から一番希望が多かった工学科に絞って九州帝国大学、京都帝国大学などの工科大学について創設費や諸経費などの調査を開始した。しかし、工学科を設立するにしても誰か中心人物がいなければならない。そこで、東京帝国大学工科大学学長、土木学会会長、理化学研究所長などを歴任した古市公威に中心人物となる事を交渉したが、多忙であり不可能であると断られた。鎌田塾長は京都帝国大学を調査の後、京都帝国大学理工科大学学長で電気工学専門の難波 正のもとに石田新太郎を差し向けて帰京した。難波は東京帝国大学とパリ大学を卒業した工学博士であるが、親切に対応し、石田に対して次のように答えた。「古市公威さんがやってくれば人がついていくだろうが駄目なら仕方がない。誘いを受けたが、自分も無理である。しかし、福沢諭吉とは切っても切れない関係の人に、北里さんというすごい有力者がいるではないですか。北里さんがいったん采配を振るえば天下の名医が立ちどころに集まり、立派な医学科が出来ること間違いなしですよ」。石田は帰って鎌田塾長に報告した。塾長はおおいに賛成して言った。「北里博士がやれば勿論立派に成立するだろう。その話は今が初めてではない。前に北里さんとは二度も三度も話したことがある」。そこで、北里に是非やって欲しいと頼むと「勿論非常に賛成だ。専門学校なら50万円、大学なら120万円かかる。」という返事であった。塾長は工学科から医学科に切り替える事に決めた。理由は、医学科の方が工学科よりも設立資金は高くつくが、付属病院からの収入で維持費を賄う事が出来る事と、工学科では得られない大物の中心人物とその一派の卓越した人々がいる事であった¹¹⁾。かくして、鎌田塾長は具体案を作成し大正5年3月7日の評議員会の臨時会に提出した。審議の内容は、上記の理由による医学科設立の提案、その経費(敷地の購入を含め創設時と年間維持費)、これらの実施につき調査立案する特別委員会の設置であった。ところが、その時の評議員会では、工学科説が圧倒的であり、医学科設立なら金は出さないと明言する評議員もあり、わずかに池田成彬、石河幹明ら2~3名が賛成したのみであった。実業家の大部分は技術家を必要として

おり医者を雇う予定はない事、医者過剰と言われる時に医者を作る必要はなく、医学科の卒業生の捌け口に困るのではないかと、また、創設費が50万円では専門学校程度のものでしか出来ず、せめて100万円を越す予算とし名実共に充実した医科のある大学にせよ、などが反対の理由であった。そこで、今回は特別委員5名を指名するのみとし、さらに調査研究を進める事になった。この中には北里も入っていた。その後、5人の特別委員は3回集まり、大正5年4月4日の評議員会で次のような報告を行った。「工学科か医学科か、設立には両者に一長一短があり決まらなかった。最後に、工学科と医学科とを同時に設立しその基金を150万円位として募金したらどうかという案も出た。これに対して、両方出来ればよいけれども、万一出来ない場合には医学科より始め、工学科は他日に譲るという案も出た。そこで、5人の委員会の中で多数決で決めるよりも評議員会に報告して熟議してもらおう事にした」。これを受けて、この評議員会で意見交換の後、まず医学科設立を標榜し、募金額90万円を目標とする。ただし、付帯条件として、医学科に化学科を付設する。ならびに、理工科の人物も育成するという事になった。100万円も無理であろうと思いつつ募金を始めたが、第一次世界大戦の影響もあり好景気のもとで、各方面への働きかけ、多くの企業や社中の協力により、皇室からの下賜貸金3万円をも含め結果として300万円²⁵⁾～450万円⁵²⁾が集まった。ただし、この間に建築費も約3倍に上昇していた。話は前後するが、鎌田塾長は、大正5年3月7日の評議員会に医学科の設立を提案した折りに、「医学科なら金を出さない」と言った評議員などに対し、「お前たちは慶應義塾の先輩だと言って世に立っているが、天下に公表した医学科設置に、先輩が金を出さないから成り立たないと言っていいか」と言って説得した。医学科なら金を出さぬという実例を挙げると、福沢を常に支持し、彼が北里に研究開始可能とさせた伝染病研究所を作成・助成した時にも援助した森村市左衛門の10万円の寄付は他日理工科設置のためとの指定寄付であり、鈴木梅四郎の隈川八郎洋行費寄付は、同人を後に理工科教授に採用する事を条件としたものであった^{25, 52)}。また「医師過剰とさえ言われる時に、いかに中心人物たる北里を迎え得るといっても卒業生の捌け口に困るのではないかと」との説に対しては「成るほど東京の銀座あたりを見れば医師が多いかも知れぬが、一歩地方を見れば、按摩だの生薬屋が漸く必要を満たしているくらいのものである。また、東洋の他の国でも医師は非常に少ない。医師の売れ口には決して困らない」と対応している。このような経過を経て、福沢が重視した自

然科学系教育関係で医学所に次ぐ学科として、医学科が大正6年4月から発足した。ここに導いたものは、北里の科学業績と福沢の広範囲にわたる庇護、鎌田塾長の英断とその英断の動機付となった塾外からの提示、すなわち京都帝国大学理工科大学の難波正学長の価値ある提言、そして社中ならびに財界各方面からの好意ある献金であったと言えよう。

3. 北里柴三郎と医学科

北里は福沢の存命中から屢々医学科の設立を進言していたが財政困難の理由で実現されなかったし、また、その後も鎌田塾長に働きかけていたが取り上げられなかった。その時点で北里は医学教育について多年の経験を持っていた。明治27年愛宕山下に伝染病研究所が新築された時に早速研究志願者の入所を許可した。研究期間は3ヶ月で、初めは毎期5～6名に過ぎなかったが、明治33年3月、研究所が内務省に移管されるまでに450人もの研究者を養成した。さらに、官立伝染病研究所となつてから講習は年3回、一期3ヶ月で細菌培養法、動物試験、臨床的診断などを習得させた。大正3年、同研究所が文部省に移管され北里が所長を辞任するまでに講習生は2,400人以上にのぼった¹⁷⁾。したがって、経営について独自の見識を持ち、福沢より受けた多年の恩顧に報いるのはこの時であると決然立って設立準備に当った。以下は大正6年1月10日の「福沢先生記念会」での挨拶の内容である。「先生の厚い知遇を得た自分が同校を担任する事は大いに光栄である。飽くまでも微力を尽くす所存である。新大学では現下医育の弊風を一新して、基礎医学と臨床医学との漣繋を密にし、学内は融合して一家族の如く全員挙って斯学の研鑽に努力するを以つて特色としたい。化学科は将来純然たる化学研究所の基礎として独立の経済を営む財源たる様計画を樹てた」(三田評論, 235号, 大正6年2月刊)²⁶⁻²⁸⁾。鎌田塾長は、三田評論(229号, 大正5年8月刊)の中で、次のように記している。「北里は、もし学校の経済不如意の場合には北里一派の各自が自労自活して大学に貢献するを辞せぬ覚悟であるという事で、その熱意は実に敬服に堪えない」。そして北里自身は福沢の恩義に報いるための医学科創設と医学部長就任であるので、給料その他の報酬を受ける事は一切拒否した^{5, 17, 52)}。

4. 医学科・化学科設置の決定

かくして大正5年6月20日、医科大学設置協議案を決定し、7月26日には常置委員として理事、顧問の他に北里柴三郎を含む10名の常置委員を指名し、8月に

は医学科化学科設立趣意書を発表して広く資金を募ることになった^{24, 25, 27)}。趣意書には次のように記されている。「(前略) 義塾は無形の学問のみを以って甘んずるものにあらず、更に進んで有形科学の発達を謀るは義塾本来の希望なり。福沢先生が終始一貫開業の必要を唱えて已まざりし所以も亦此に在り。即ち醫、理、工等諸學科増設の第一着手として先ず茲に醫學、化學の二科を創設し、以って我が學問界に貢献する所あらんとす(中略)。化學の一科に至りては醫學の研究と密接の關係を有するを以って同時に其設立を図りて假に之を醫科に附属せしめ、藥學其他の研究に便にし、他日理工科を開設するの開基たらしめんとす」。かくして、大正6年(1917)年1月に予科1年生を募集し、4月16日開講するに至った²⁵⁾。化学科の構想はやがて昭和12年(1937)に医学部所属の特殊薬化学研究所として実現する。初代所長は薬理学の阿部勝馬教授で、研究所につき次のように述べている。「(前略) 本研究所においては和漢薬、民間薬或は特殊の薬効を現す新薬等に就いて、化学的並びに薬理学的研究を併行して薬理学的に効果ありと認められたものは、実験治療に応用して、医薬の進歩改善に貢献したい」(三田評論、第481号、昭和12年9月刊)。その後、昭和19年11月に本塾直属の薬化学研究所に発展し、所長に西野忠次郎教授、副所長に阿部勝馬教授、主任教授に京都大学医学部薬学科から上田武雄教授が赴任した。上田教授は叙勲記念会の席上の挨拶で、小泉塾長との間に、薬化学研究所を発展させ、これを礎石として慶應義塾にも薬学部を創立させようという将来構想があったと述べている³⁰⁾。同研究所はその後も一度医学部所属となって機能していたが、平成8年廃止となり先端医科学研究所への吸収合併となった。

5. 敷地

鎌田塾長談²⁵⁾によると次のような状況であった。北里は凡そ12,000坪の地面が必要であると言った。その面積を持つ場所を鎌田塾長、北島多一(後の内科学教授)などが東京中を探し廻った。目黒駅寄りの福沢捨次郎邸、渋谷の福沢桃介邸、青山墓地脇の第一師団射的場、その他を見て廻ったが、広さおよび患者の交通の便の観点からどれも一長一短があった。今の場所を得るに至ったのは日匹信亮という人の努力であった。日匹は主計監をしていて楠瀬陸軍大臣の手伝いをしていたが、楠瀬が大臣を罷めると同時に罷めて紀州徳川家の財務部長になっていた。日匹に陸軍に良い地所が無いかわかると、信濃町にある輜重大隊の隣に軍馬練習所がある事がわかった。その頃、陸軍は二個師団を拵えるために諸方の土地

を売って金を拵える事になっているとの話であった。そこで、直ちに見に行くと、非常に埃がひどい。とても病院には向かないと思われた。さらに他の場所を捜していると「そこは、やがて明治神宮外苑となってすっかり木を植え立派な公園になる」と言う。それでは、早速買う事にして、日匹氏を介して話を進めた。この間、60万円というが30万円にまけてくれという話を出し、鎌田塾長が長岡陸軍大臣、勝田主計大臣などへの説得・説明を経て、市木次官との交渉で、所有権の移動が後でよければ30万円で購入出来るという事になった²⁵⁾。ところが、この間、北島多一教授は知己の佐藤四谷区長から四谷区がその払い下げを受け、商店の並ぶ繁華街の作成を計画中である事を聞いた。そして、四谷区の区民が聞きつけて、大変な反対運動を起こした。当時区議員であった鳩山一郎(後の総理大臣)も反対した⁵²⁾。その後東京府、内閣、陸軍省、大蔵省も骨を折ってくれて政治工作を施すと共に、区当局と区会とに折衝し、また、四谷区にこの土地を買う資金が無かった事もあって、円満解決を講ずる事が出来た。これには鎌田塾長の政治力が物を言った。結局、22,000余坪の土地を得た。用地買収に90余万円を要した⁶⁴⁾。この時四谷区が示した妥協条件は凡そ三箇条であった。その一は小学校の敷地として1,500坪を40万円で譲渡し、その内6万円を四谷区教育資金に寄付する。その二は小学校児童の通学の便に供するために医学部構内に東西に貫通する道路を設ける事(現在の東校舎の前の道路)、その三は看護婦養成所の存在する土地(現在の看護婦寮のある土地)約1,000坪を有租地として四谷区の税収増加に資する事である。なお、小学校の敷地に供する場所は現在の予防医学校舎の存在する場所を指定してきたがロックフェラー財団の寄付による予防医学校舎建設予定地であったので断り小学校は現在の位置に変えたものである。大正7年に赴任した加藤元一教授(生理学)の記載によると、現在の第二校舎以北には大きな池があった。この辺りは某名家の庭園であり池に臨んで見事な老松が枝を差し延ばしていた。ある時一人の子供が池に落ちて溺れそうになった時にこの枝に取りすがって助かった。以後「人助けの松」と呼ばれていた。加藤教授の発案でこの松を病院正門の左の土手上に植え替えた。枝は門の幅の半分の位置にまで達していた。人命を預かる病院の正門脇にあり、所を得たものといわれていた。この松は昭和35~42年頃弱りやがて枯れた。前記の池は病院建設時の残土で埋められた。加藤教授の神経伝導研究の材料の墓はこの池から採られた。同教授は新宿4-4の長善寺に墓塚を建立された(医学部新聞第457号、平成元年7月発行、同第

492号、平成4年6月発行、同第493号、平成4年7月発行)。

6. 本科開校と開院

この信濃町で校舎の一部が建ち、本科の授業が始まったのは大正8年(1919)の秋からであった。これに先立ち、その前年の大正7年4月には付属看護婦養成所も開設された。所長は北島多一で、校舎と宿舎は北里が経営する土筆ヶ岡養生園に建てられた。大正9年秋には木造二階建ての病院に外来・入院の諸科を揃え、病室数196、ベッド数300~400、建坪7,500坪の付属病院が完成した⁶⁴⁾。大正8年の大学令により医学科は医学部と呼称変更となった。大正9年11月6日医学部の校舎と病院の完成の期に医学部開校と病院開院式が行われ、総理大臣原敬をはじめ多数が参列した。医学の元老石黒忠恵子爵は祝辞の中で次のように述べている。『明治初年頃に於ける福沢先生の勢力は偉大であった。「文部は竹橋にあるが文部郷は三田にあり」と称えられた事からも判るであろう。往年北里博士が外遊より帰り、伝染病研究所設立に際し逆境に立つや、予も其の相談に与り、予の同僚にして先生の友人なる長与専斎翁より先生に話し、先生と故森村翁との後援によって伝染病研究所の基礎を開くを得たのである。かかる縁故により北里博士を中心とした先生の宿志である医科大学が、斯も最大に開校式を挙げる本日、予が眼前には故福沢先生の温顔を彷彿する』^{30, 37)}。ここに至る経過で、諸種の障害を乗り越えて事が進んだ理由としては、福沢の恩に感じた北里の報恩の強い意志と、終生の仕事として当時の医学界で錚々たる医師を網羅した事、鎌田塾長が政界に隠然たる勢力を有して難問を易々解決した事、北里に配するに北島多一、鎌田に配するに石田新太郎がいて、合作の妙を得た事に帰しうるのである²⁵⁾。北里(当時38才)はベルリンに滞在中、当時24才でストラスブルグ大学に留学中の生化学者荒木寅三郎(後の京都帝国大学総長)が訪ねて来た。その時、外国でも熱と誠があれば何でも出来る旨話をしたが荒木はこれに感激し、留学先で教授の信用は厚く成果を挙げて帰朝した。以後、北里を助け、研究所や創設期の慶應義塾大学医学部に有能な人材を送るなど深交が続いたと言われる³⁹⁾。医学部開設時、荒木総長推薦の教授方は岡嶋敬治(解剖学)、加藤元一(生理学)、川上 漸(病理学)、阿部勝馬(薬理学)であった³⁷⁾。

7. 福沢・北里の恩人達

医学科の誕生は福沢の本邦社会啓蒙思想に基礎を置い

た自然科学重視の考え、および北里の卓越した科学業績と医学科創設の熱意によるものである。さらにそれらの成因の背景を見ると、この二人の先人がそれぞれ恩を受けた人々の影響が極めて大きい事が察せられる。

a) 福沢論吉関係

適塾の緒方洪庵および咸臨丸での航海時の提督であった木村撰津守喜毅の影響が大きい。

緒方洪庵の塾で医学書、理工学書を読み、また、後の明治維新前後に活躍した多くの医師と接触する機会が与えられ、自然科学の法則性その他医学、物理学などについての基礎的知識を学び得た。適塾での勉学の状況および緒方の指導などについては既に記載した。福沢は安政5年(1859)に江戸に出府し、洪庵は文久2年(1862)に徳川家の奥医師となり江戸に来たが、文久3年6月に没したので緒方の生前に具体的な形で恩に報いる機会はなかったが、毎年挨拶に上っていた。洪庵の死後は、八重子未亡人に事ある毎に礼を尽くし、明治19年に未亡人が亡くなるまでこの状態を続けた。ある時、訪れると未亡人は病に伏せていた。背中をさするなど看病をして後帰る際に布団の下に百円(今の百万円)を入れて、回りの人に看護を宜しく頼んで帰った。未亡人は後に「福沢さんは若い時から儉約家であったので、その心持ちを察して有難く頂くことに致しました」と述懐している。福沢家は元来余り裕福な家ではなかった。加えて福沢は、兄の没後、40両の治療費を払うために家財を売り、わずかに残った金を母のために置いて適塾に帰った。洪庵は事情を察して、奥平十学の蘭本を借りて福沢が写してきたベルの築城方法書を翻訳するという名目で食客にしてくれた。この事情を未亡人は当然知っていたのであろう。その福沢が置いていった百円を謝意表明と理解し、快く受け取ったという意味であったのであろう。未亡人の没後も在阪の折りには必ず緒方夫妻の墓参をしている。その時随行者が墓石を洗うなどの清掃に手を貸そうとすると、それを制し「この仕事は私がやることです」といって手をつけさせなかった^{7, 50)}。

木村撰津守は安政6年(1859)幕府が日米通商条約の批准書交換のため、新見豊前守正興を正使とする一行をアメリカに派遣する事を決めた時に、軍艦奉行、派遣の監督、咸臨丸の提督であり、艦長は勝海舟であった。木村は桂川家第7代甫周国興の妻久邇の弟であり、両家は姻戚関係にあり、銭新座に住んでいた。桂川家は徳川家の奥医師の家系で、日本国中の蘭学医の総本山とも言われ、福沢は江戸に出ると直に桂川家を訪れ以後出入りした。桂川家には知的環境と人脈があり、

洋学者達が頻繁に訪れ、海外事情を聞いたり、西洋の本を借りたりしていた。そこで咸臨丸の米国行きを知り、どうにかして木村のお供をしてアメリカに行きたいと思い、桂川の紹介状を持って木村を訪れ願意を述べた処、即刻許してくれ従者として渡航する事が決まった^{3, 48, 56)}。これが最初の渡米の経緯であるが、この事はその後のヨーロッパ諸国視察および再度の渡米の契機となった。すなわち、それまでは日本国内で西洋文化の一部を垣間見る機会しかなかったが、この過程で西洋の文化、社会、医療、政治などの状況を直接に見、かつ体験し、日本社会を啓蒙する意志が決定付けられたと考えられる。幕府の要職にあった木村は明治政府より出仕を勧められたが応じず、明治4年以後30年間著述と草木相手に悠々自適の生活を送った。福沢は以後木村に対して厚い礼節を尽くした。彼は従来他人の著書の序文を書く事を断ってこられたが、木村が後年書いた「三十年史」には喜んで寄稿し「今度の航海は論吉が机上の学問を実にしたものにして、畢生の利益これより大なるものなし。而して其利益は即ち軍艦奉行知遇の賜にして、終に忘る可からざるものなり。明治24年10月16日、木村旧軍艦奉行従僕福沢論吉誌」と書いている。盆暮れは必ず挨拶され、明治26年7月木村が腸チフスに罹り赤十字病院に入院した時は親身になって看病に当たり、その費用を全額負担した。また、芝神明の大火の際には慶應の学生を連れて木村邸の火災を消した^{3, 48, 56)}。

b) 北里柴三郎関係

北里が恩義を感じている人々は、マンズフェルド、長与専斎、コッホ、福沢論吉であり、また、色々な意味で支持してくれた知友は、長谷川 泰、森村市左衛門であろう^{4, 18, 37)}。

セー・ゲー・ファン・マンズフェルドは慶應2年(1866)に来日し、長崎の精得館で医学伝習に参加した。ユトレヒト陸軍軍医学校で教育経験があった。明治元年の大政奉還により精得館は長崎医学校となり、幕府の関係者は退き、長与専斎が頭取(校長)となった。マンズフェルドは長与と共に医学教育に携わり明治4年からは3年間熊本県医学校で教育と診療に従事した⁵¹⁾。臨床医としても篤厚誠実で一人で基礎医学と臨床医学を教えた。彼の教育理想は「教師は学校にて直ちに学生を医者に仕立てるものではない。学生をして真の研究上行くべき道を示し且つ、学生自ら研究すべき方法を教えるものである」。北里を特に矚目し自宅に招いて熱心に教えた。親切的指導に応え、めきめき頭角を現した北里は二年後には教授の講義を口訳し

て学生に授ける助教となった。ある日、顕微鏡下に肉眼では見えない細胞・組織・細菌を観察し未知の世界に誘い込む医学の魅力の虜となった^{37, 55)}。これを聞いたマンズフェルドは大変喜び「もうここで教える事は無い。自分もオランダに帰らなければならない。これから東京に出て東京医学校に行きなさい。そこで学んだら必ずヨーロッパに留学しなさい」と言い残して別れた。北里の将来の指針を与えた恩人となった^{8, 47)}。マンズフェルドは京都、大阪の医学校で教鞭をとった後帰国したが帰国してから約20年後、北里は留学中のコッホ研究所から英国の学会に出席する途中オランダのハーグに旧師マンズフェルドを訪ね、旧恩に感謝した。

長与専斎は大村藩医の家に生まれ、福沢より一年前に適塾に入門した。安政5年(1858)に彼が江戸に出た後、次の塾長になる。万延元年(1860)長崎でボンベに学び、大村藩の侍医を経て、慶應2年(1866)再び長崎でボードウインに学ぶ。明治元年長崎精得館(後の長崎医学校)の頭取。北里が東京医学校に入った時は同校の校長であった。北里の卒業時には初め130人程いた同級生は26名に減っていて、26人中8番の成績であった。非常に厳しい採点で全科目の平均で「甲」を取れた者は26人中2人のみで、あとは「乙」であった。長与が校長時代の最も才気に溢れ、かつ、気魄に富む教え子であった。卒業して内務省衛生局に入った時、長与は衛生局長であり、北里のドイツ留学および留学延長に陰に陽に尽力した^{8, 25, 37)}。明治25年に北里帰国後、長与は福沢に頼み彼の借地に家屋を建てさせ、森村市左衛門の援助も加えてで私立伝染病研究所を立ち上げらせ、北里に研究を開始させた。当時、大日本私立衛生会副会頭であった長与らの努力で研究所は同衛生会の運営となり、明治27年2月、愛宕下に移り大日本私立衛生会伝染病研究所となり、その後国営となって北里が所長として活躍する道を開いた^{4, 17)}。北里は「日本の衛生行政の父」と言われた長与を師として喜び、終生この人のために尽くそうとした。専斎が還暦の機に「長与衛生文庫」を計画した時には率先してこの事業の実現に努めた。専斎の長男称吉は東京大学医学科の一年後輩であり、同時期にドイツに留学し交流が深かった。胃腸病院長で日本消化器病学会会長であった称吉が腹膜炎の重症に陥った時、北里は後藤新平らと協力して当局に働きかけ、長与家に爵位を与える事に成功した。すなわち明治43年7月20日、父専斎の勲功を理由に称吉に男爵が授けられた。それから40数日後称吉は亡くなっ

た^{17, 52)}。次に北里と長与専斎との関係の中で専斎の次男の又郎との話題に移るが研究所に関連する話なので、事前に当時の伝染病研究所を取り巻く状況について触れておく。前述のように北里は大日本私立衛生会伝染病研究所で研究かつ免疫血清作製および血清療法を行っていた。一方政府は明治29年に血清薬院を開き北里を院長とした。北里は私立研究所と両方の長となったので、研究所の血清製造の設備を同院に献納し、高弟の高木友枝を院長とし自分は顧問を引き受けた。同年、大日本私立衛生会が経営していた牛痘種継所が国立となり痘苗製造所と改名した。明治31年、国は私立伝染病研究所への補助金を打ち切り、32年から国立伝染病研究所を興し、管轄は内務省であった。所長を北里に依頼した。北里は引続き所長を引き受けるべきか否か福沢に相談したところ、政府が一切北里の意のままに運営させるなら受けてもよいだろう。しかし、政府というものは風の向き次第で何時どのように変わるか知れないものだから、足許が明るいうちに後日の用意だけは怠らないように注意した。北里は所長を引き受けた。そして国立の伝染病研究所、血清薬院と痘苗製造所と同じような伝染病対策機関が三つあることになり不経済だから合併するべきだと建議しそれが採用され、明治38年、白金台に広大な土地を得て合同庁舎が完成した。これが、白金の伝染病研究所（現在の東京大学医科学研究所）である。ところが正3年、大隈重信内閣の時、文政統一および行政整理を理由に突然、所長の北里に相談一つ無しに所管を内務省から文部省に移し、追って帝国大学に属さしめ、医学部の傘下に置く計画を企てた。話は極秘裡に運ばれ、内務官でも知っている者は一人の書記官のみであった。従来、伝染病研究所は室内の研究に留まる事なく、予防や防疫の実践活動を伴うべきであるという北里の多角的予防活動の信念とは異なる体制であり北里は断固承諾せず、所属は変化したが一貫して22年間勤めた研究所の所長を辞した⁵⁸⁾。福沢が注意した通りの事態となった。退所に際し培養、動物飼育、ワクチン・血清製造法、諸般の業務など遅滞なく事務引き継ぎを行った。のみならず、後任の不便を察し、開講中の講習もその終了まで講義を引き受けて支障ないように計らった。世間は飛ぶ鳥跡を濁さぬこの引き継ぎの模様を「赤穂の開城」に擬した。研究所の構成員である技師7人（北島多一、志賀潔、秦佐八郎、宮島幹之助など）、技手10人（高野六郎 他9人）、嘱託13人（小林六造など）、用務員など全員が北里に殉じて辞職した^{17, 30, 37)}。伝染病研究所辞職後、北里は直ちに北里研究所の建設

に取りかかった。長与専斎の次男又郎にとって北里は結婚の仲人であった。彼は東京大学医学科の教授であり大正8年4月に上述の伝染病研究所の第4代所長に就任する事になった。又郎は伝染病研究所を運営するに当たり北里と話し合う必要があると痛感していた。伝研移管で北里がひとり淋しく伝研の建物から出て行く姿が目に見えていただけに気になった。北里には帝大派に積年の怨みがある筈である。それには、いくつかの理由があるが一例を挙げると、1888年、コッホ研究室で研究中、ドイツの医学誌にオランダのベーケルハーリングの脚気病原菌の発見と、北里の師の緒方正規の脚気菌に関する報告が抄録された時、同研究所でも話題となり、コッホの高弟レフレルは脚気病原菌に関する発表の正否を北里に問うた。北里はベーケルハーリングの研究の不備を指摘し、明治21年レフレルの勧めによりその見解を雑誌に発表した。さらに同じくレフレルより師である緒方の脚気菌に関する研究成績についても、純粋に科学的見地から意見を書くべきだと勧められ、その成績からは脚気の病原菌とは認めない事を具体的に指摘した論考を発表した。これを見た森林太郎（鷗外）は「北里は識を重んぜんとする余り情を忘れて」と評し、帝大の加藤弘之総理も「師弟の道を解せざるもの」と快く思わない事を表明した。こればかりではないが、このような事が北里と大学との間の円滑を欠くようになる原因となったと言われる⁴²⁾。又郎はこのような怨みをいつまでも引きずって争っているのはお互いのためにならない。いつか解消しなければならないが、それには伝研の所長に就いた自分が北里の胸に飛び込むのが最良であると考えた。又郎は北里に挨拶に行き所長就任の報告と、6月26日に予定されている所長就任の招待会へ北里をはじめ北里研究所の所員（旧伝染病研究所所員）の列席を懇請した。北里は「いいとも、喜んで行かせてもらおう」と返事した。当日、帝国ホテルでの会には各界61人の列席者があり、北里は指名されて挨拶に立った。皆は北里が何を言うか注目した。北里は移管事件には全く触れず、長与専斎以来の自分と長与家との関係を語り、今日の招待に謝辞を述べ、伝研の更なる発展を祈念する旨話し着席した。翌日の新聞は「長与はオツなことをやる。北里も大きい」と論調した⁶³⁾。

福沢諭吉には、留学から帰国後、長与専斎からの紹介で研究の場として私立伝染病研究所の建設以後、土筆ヶ丘養生園の建設、養生園の優れた経営と北里研究所創設の蓄財、同研究の円滑な運営と日記として年間の資料の作成をおこなった有能な事務長田端成晟の派

遣⁴⁾、伝染病研究所の文部省移管問題に対応する指導と実務上の援助など多方面に互り世話になった。対する報恩の形が慶應義塾大学医学科（後の医学部）の創設と十数年にわたる無報酬の医学部長としての活躍であろう。福沢の忠告・指導の一部については既に言及したが、彼の実務上の援助は次のような経過の後に発足し、以後数回におよんだ。すなわち、北里はコッホ研究室で、破傷風菌の培養と同菌に対する抗体作成に成功、同様の手技でペーリングの扱っていたジフテリア菌についても成功に導き、コッホのツベルクリン作成にも関与して、科学者として大きな成果を収めた。長与専斎が配慮してくれた6年間の留学期間を終え、帰国準備中の明治24年（1891）10月に内務省より「帰国の途中、英、仏、米を巡視し、衛生事情を調べて欲しい」との訓令を受けた。視察したいずれの国でも北里の業績を知っていた。パリのパスツール研究所ではルイ・パスツールより研究の成果を称賛され、アメリカのペンシルヴァニア大学では雇用を勧誘されたが断り、ベルリンではプロイセン王国より外国人としては初のプロフェッソール（大博士）の称号を受けた⁵²⁾。北里がドイツでの赫々たる学勲を持って明治25年5月に帰国した時、日本の学会は極めて冷淡であった。北里は日本のように伝染病が流行している国には早く伝染病研究所の設立が必要であると各方面に訴えた。大日本私立衛生会および中央衛生会（官立）は研究所の設置を計画し、文部省も東京帝国大学医科大学に伝染病研究所を設置する計画を立てていたが、いずれの計画にせよ予算が国会の承認を得るまでには最低2年を要する状況であった⁵²⁾。その頃、長与専斎は内務省衛生局長を辞し大日本衛生会の副会頭であったが、ある日福沢を訪問した時、話のついでに北里の研究業績を語り、これだけの学勲を立てた者が帰国後半年も過ぎようとしているのに、研究所どころか研究室もないとは日本の恥であると嘆いた。それに対し福沢は「北里の研究がそのように重要なものであるなら、学問の研究の助成は自分の素願であるからおよばずながら自分の私財を抛って研究を助けようと思うが一度北里という男に会ってみたい」といった。一方、北里は日本で空しく日月を費やしているのを堪え難く思い、かつてイギリスのケンブリッジ大学の細菌学研究所の所長に招聘されたこともあり、また、帰国前にアメリカのペンシルヴァニア大学、ブルックリンおよびボルチモアの病院から好条件で招聘された事もあったので、イギリスまたはアメリカに行こうかと思うが、と長与に持ちかけた。長与は「まあそういうな。とにかく、

福沢諭吉が会いたいといっているから会ってみろ」と勧めた。北里が福沢を訪ねたのは明治25年9月末か10月初めと思われる。その時彼は「つまらん俗論にこだわってはいけない。この際、資金を集めてから仕事にかかるよりは、まず仕事を始め、それから方策を立てたらよい。私から行動を起こそう。幸い芝公園内に借りてた土地があるから、そこに必要なだけの家屋を構えてスタートしようじゃないか。また、毎月必要な研究費も自分が負担するから、どれだけの研究費が掛かるか計算してもらいたい」と促した。次いで友人森村市左衛門が設備・機器購入資金1,000円を寄付した。最初の援助は北里の学識と経験を生かせる伝染病研究所の設営であった。場所は御成門の傍で、芝公園5号3番地（現港区芝公園1丁目1番地）であり、現在松下電器産業東京支社の入るナショナル1号館のあたり⁵²⁾あるいは中国料理店「留園」の辺りとの記載がある。かねてから福沢がおいおい成長する子女たちの新居を構えるために用意しておいた借地であった⁵⁹⁾。元来、福沢は学者の研究を奨励助成したいという強い念願を持っていた。彼は適塾においてひたむきに学問修業に専念した。彼の周囲の塾生も同様であった。彼らは世俗の立身出世を顧みず、ただ学問研究に没頭した。そこに苦しみもあれば、したがっておのずから楽しみをも得ていた様子は「福翁自伝」の語るところであるが、福沢は自分の体験から科学探究者の気持や、その幸福感というものを知っていた。しかしその後の彼の境遇はあこがれた物理学の研究のような研究活動のみに専心することを許さなかった。そこで、自分が果たす事が出来なかったその念願を、他人の研究を助けるという事によって果たそうとしたものであろう。その念願の幾分かを果たしたのが北里に対する援助であった²⁷⁾。学者をして発明・発見の功を遂げしめるには、機械材料などその研究実験に必要な諸般の設備を整えなければならぬのは勿論、その学者の一身にも生活上の不安なく、一切の俗事を顧慮せずして、一意専念終身その研究に没頭し得るの保証を与えねばならぬ。学生への講演で福沢は次のように話している。「老生が真実の目的を申せば、一種の研究所を設けて、5、6人～10人の学者を選び、之に生涯安心の生計を授けて学事の外に顧慮するところなからしめ、且つその学問上に研究する事柄もその方法も本人の思うがままに一任して傍より喩を容れず、その成績の果して能く人を利するか利せざるかを問はざるのみか、寧ろ今の世に云う実利益に遠きものを選んで其の理を究め、之を究めて之に達せざるも可なり。之が為に金を費

やして全く無益に属するも可なり。その人の一生涯に成らざれば半途にして第二世に遺すも可なり（以下略）。俗に言えば、学者を飼ひ放し、または飼ひ殺しにすることである⁶⁾。学生に話したのは明治26年（1893）11月14日で、10人の研究者をして思う存分研究させる費用として当時の物価で50,000円を考えておられた。すなわち、生活費として一人一年1,200円、10人で12,000円、生命保険料として一人一年2～300円、10人で2～3,000円、研究費として年間35,000円、以上合計50,000円である²⁷⁾。芝公園の土地の建物は明治25年10月に工事を開始、一ヶ月後に落成した。建坪10坪余、二階建てで上下6室であり小型だが日本初の伝染病研究所となった。そうすると北里周辺の他のメンバーも黙っていらなくなり、完成後間もなく大日本私立衛生会は副会長の長与専斎を通じて「新築家屋と土地をそのまま我々の会が貰い受けて経営したい」と申し入れた。福沢は「誰が経営しようと自分の頓着するところではない」といい、土地、家屋共々一切無償で提供した。衛生会は研究所の運営を全て北里に委託し、その費用として年間3,600円の支出を決定し（明治25年11月19日）、かくして大日本私立衛生会伝染病研究所として明治25年11月30日に開所した。内務省は北里を「技士」（年俸1,200円）に任命し、自由に研究する事を許した。開所後、研究室は手狭であり、また、北里がツベルクリン研究に関与していた事を知って患者が多く来たり病室も不足であったので、明治26年1月、大日本私立衛生会は研究所の移転、新築を決めた。芝区愛宕町二丁目所在の内務省管轄地の賃下げが同2月に許可された。一方、政府は東京帝大医科大学付属伝染病研究所設立案を排し、長谷川 泰（国会議員）の努力により大日本私立衛生会伝染病研究所に対する国庫補助が決まった。ところが、工事着手の直前、明治26年4月、「伝染病」という名に敏感に反応した周辺区民が猛烈な反対運動を起こした。政治家、貴族院議員、前帝国大学総長などの著名人が反対運動に参加した。これに対し、長谷川 泰は5月の大日本私立衛生会臨時総会において政治家末松謙澄（伊藤博文の娘婿）の研究所排撃演説に対し4時間にわたる大演説を行った。さらに再び福沢が登場する。まず自らが主催する時事新報に3回、反対運動を非難する論説を書いた。さらに研究所の隣に息子捨二郎の家を新築し、安全性をアピールした。この間、北里は対策や交渉のため、本来の研究が全く出来ず、これでは研究所を引き受けた約束を守れないという理由で、委託を断ろう

としたが、星享衆議院議長、福沢などが押し止めた。ここで、福沢の三度目の登場となる。8月11日、福沢は再び「時事新報」の論説で北里が研究所長の辞意を表明した事を記し、北里が長与専斎副会長に提出した辞任書の内容を紹介した。曰く「細菌学者の如きは純然たる脱俗の境遇にて初めて出来るものなるに、この様な紛争に巻き込まれてしまい、いたずらに歳月を空しく過ごし、研究の実を挙げる事が出来ない。これでは、本会の委託に背く事になるので辞任する」。実は、この辞任書は、福沢の筆になるものであった⁵⁹⁾。論説には、同時に、政府は補助金は国会で決議したのに、この問題の解決に尽力したか否か、と政府の責任まで追求した。9月中旬に、政府の意向を受けた東京府知事は伝染病研究室と病院の建設を出願通り許可した。研究所は500坪余の敷地に、研究室、病院、事務室、培養室など8棟から成り、明治27年2月8日に移り、病室は17日から患者を収容した。福沢の第四番目の援助は「広尾土筆ヶ岡養生所」の建設である。研究所建設の経過を見ていた福沢は「今後は篤志家や政府の補助を頼りにする事は得策ではない。他力本願は駄目だから病院を建てて資金を蓄積し自力主義で進まなければならない」と主張しその方向に指導・実行していく事になる。研究所発足の直後から北里の名声を恭って肺結核の治療を受けようと診察を乞う者が増えたが、研究所は本来診療所ではない。福沢は予め長与や森村と諮り、既に明治26年4月に森村と費用を半分ずつ出し合い、10,000円かけて60人ばかり患者を収容できる建築物を作り広尾土筆ヶ岡養生所と名付けた。日本初のサナトリウムである。土地は白金の福沢の別荘の脇の土地で、2,000坪余の土地を借りた。同時に、経営感覚の優れた田端重晟を北海炭鉱鉄道より引っ張って事務長に送り込んだ。芝白金三光町（現港区白金5丁目9番1号）で現在、北里研究所病院が建っている場所である。明治26年9月16日に開園し26日には早くも60床の病室は悉く塞がった。その後、数回の増築を重ねた。ここでは、地代は高くはせぬがとにかくとる、10,000円に関しては安くはあるが利息をとることにした。ところが、翌年の暮れまでにほとんど10,000円を返還してしまった。次に、その土地の隣地に三井の土地があった。借りるよりは買ってしまえということで福沢はその土地を買入れた。養生園の地坪は4,000坪となった。園は長与を顧問格、北里を医長とし事務会計を田端とした。北里はここでも研究室を設け、ツベルクリンの臨床実験、ジフテリアや破傷風の免疫血清の作成と患者への血清

療法を行っていた。伝染病研究所は明治32年に大日本私立衛生会から国営に移され内務省管轄で北里が所長であった。福沢はその時次のように注意した。「今日は政府が北里を信頼して仕事をさせるといっていても、また何時気が変わる事があるかも知れないから決して油断せず足許の明るいうちに金を蓄えておくがよい。学者は一心に研究し、養生園の方は田端に任せておいて金を蓄えるのだ」。前述の通り、大正3年に、伝染病研究所は所長の北里に相談も無く闇討ち的に文部省に移管され、やがては東京帝大医学部の付属研究所となる事になった。北里は辞任し、北里研究所を設立したが、嘗て福沢が「政府の気は何時変わるかも知れぬ」と注意したが、その時が来たものである。そして、これも福沢の勧めにしたがって田端が蓄えた資金300,000円余を元に北里研究所が建ったのである。福沢は養生園の隣の別荘から週2～3回は病院を訪れ医員を激励慰問した^{25, 52, 59)}。その別荘は、近時、高速道路作成の折に撤去された(北里柴三郎記念室、北里研究所中瀬安清名誉部長談)。移管の翌年の大正4年1月10日「福沢先生記念日」に、北里は塾長鎌田の依頼で「学問の神聖と独立」と題して講演を行った。その中で「伝染病研究所の移管問題が起った時、(中略)、私は断然辞めました。というのは、そこが私の福沢先生から精神的感化を受けた所で、人間の独立自尊は茲にあると考えたからであります」と語っている³⁰⁾(三田評論 第211号、大正4年2月刊)。

ローベルト・コッホについては既に良く知られているが、細菌の染色法、培養法を自ら開発し、病原細菌学の分野を開拓し、従来の衛生学、防疫学を一変させた細菌学者で、多種類の病原菌を明らかにし、結核菌、コレラ菌を発見し、ツベルクリンを創製したなど多くの業績をあげ、1905年にノーベル医学賞を受賞した。北里はコッホの研究室に6年余留学し、破傷風菌の純培養、ジフテリアおよび破傷風の血清療法を含め19編もの論文を書いた。北里はコッホを深く尊敬し、明治41年にはコッホ夫妻を日本に招待し、滞在は40日におよんだ。この間、新設の伝染病研究所に案内し、上野の音楽学校講堂でのコッホ講演会では北里自ら通訳し、歌舞伎観劇では森鷗外が解説するなど至れり尽くせりの対応であった。さらに、日光、宮島、保津川、長良川に案内し、地元で官民挙げての歓待を受けた。神戸医師会からの着物をはじめ各地からの贈り物も夥しい量であったという。コッホは富士の遠景を望む由比ヶ浜の景色を特に好んだ。現在も稲村ヶ崎の海浜公園に訪日の記念碑が残る。コッホは明治43年

(1910)にバーデン・バーデンで亡くなった。北里は大変悲しみ、北里研究所にコッホ神社を作り、翌年(1911)命日の5月27日に祭事を行い、以後毎年命日に祭事をおこなった。これは、第一次世界大戦でドイツが敵国となった時にも続けられた。御神体は、コッホが理髪を望んだ時に床屋の主人に頼んで取って置いてもらった髪の毛と爪および神戸医師会から寄贈された紋付きの着物を着た写真である。現在髪の毛は研究所の恒温金庫に保管されている。一説によると、日本から付いて行ったコッホのお手伝いさん村木 清がコッホを散髪中に取っておいた毛髪を未亡人が写真と共に送ってきたとも伝えられる⁵²⁾。昭和6年(1931)に北里が亡くなった時にお弟子さん達がコッホ神社とならべて北里神社を作ったが、昭和20年の戦災で北里神社だけ焼けた。コッホ神社は残ったので現在は、コッホ・北里神社となっている。第一時世界大戦後、ドイツが極端に困窮した時に北里は未亡人に15,000円を送った。当時としては高額な見舞いであった。これに対し、未亡人はグリユフ画伯の描いたコッホの肖像画を北里に送り感謝の意を表した。この絵は現在北里研究所の所宝として飾られている^{8, 17, 18, 37, 47, 52, 64)}。熊本の友人杉浦奎吾(大正3年総理大臣)の北里への追悼辞の中の一章は北里が受けた恩について端的に纏めている。すなわち「北里博士はその四大恩人の恩義、すなわちマンスフェルドの教恩、長与専斎翁の指導、誘掖せられたる所(註：誘は前にあって導く意、掖は傍から助ける意)、コッホの研究的啓発、福沢先生の後援が原素となって大成を為し得た」^{17, 25)}。

知人としては長谷川 泰、森村市左衛門、後藤新平が関係が深い。その他、医師会関係者、政治家などとの交際も広い。

長谷川 泰は佐倉順天堂の佐藤尚中の一門であるが、東京医学校長、長崎医学校長を勤めた後、医学の済生学舎を創立。内務省衛生局長の後、衆議院議員として活躍した。また、大日本私立衛生会で伝染病研究所の発足を推進させ国庫補助を受けられるように運動し、これを実現させた。また、伝染病研究所を愛宕下に作る際の住民反対運動に対し、先頭に立って演説・説明し、時には住民の暴力を押しきって事を進めた。

森村市左衛門は江戸京橋の老舗の袋屋の五代森村市左衛門の長男として生まれた。安政の大火で傾いた家運を、開港後の横浜貿易によって挽回。以後、馬具製造、洋裁店を営み、御用商人として奥平藩(中津藩)江戸屋敷に出入りするうちに、福沢を知る。後に維新政府の御用商人となったが、独立自営の方針に転じ

「富国の原素は海外通商の外なし」と悟って、日本製の雑貨、陶器などの輸出業を営んで産を築いた。その後、多くの事業に参画したが、女子教育に関心を持って種々の援助を行い、また、北里の帰国後福沢が北里のために最初の私立伝染病研究所を建設した折には、機械、設備を寄贈した^{4, 17, 18)}。

後藤新平は内務省に入ったのは北里より3ヶ月早い。二者の関係は内務省衛生局で始まったが、最初は決して円満なる関係ではなかった。後藤は明治20年コッホ研究所に3ヶ月とどまり、コッホの指示により北里に細菌学を学んだ。その後、互いに才能を認めあい相敬し、終生の交友となった。北里帰国時には長与専斎の後任の内務省衛生局長であり、また、大日本私立衛生会幹事であり、大日本私立衛生会伝染病研究所の作成に努めた。その後の後藤の政治的環境における医療・衛生関係の事項には北里は常に考えを述べ支援した^{4, 17, 18, 64)}。福沢と北里のこれらの恩人、知人の支援・協力がやがて二人の成長・思想形成、および諸活動の原動力となり、社会に大きな影響を与え、延ては慶應義塾における医学科創設の背景を成したと理解される。

8. 開学精神の発現

前述の通り、北里は医学部開学に当たり、基礎医学と臨床医学の連絡を密にし、延ては学内共同一致は恰も一家族の如き融和を期待した。

a) 関東大震災に際して

開学6年目の大正12年(1923)の震災に当たっては、首脳者より何らかの指揮命令が出る前に教職員学生は相い共に自衛の応急処置および自警の事務に従い、進んで救護・消火の任に当たり、薬局や教室など数か所から火が出たがいずれも消火に成功した。加えて、火災に会った9病院、医学部構内の西区域に作られ済生会の罹災傷病者救済のための臨時病院(後述)などの診断・治療を引き受けた。一病院は100~150ベッド分で、当然医師不足であったが、学四の学生が先生の診療を助け、外来14万人、入院10万人の処置を行う事が出来た。自己の病院の維持を自己で責任を持つ意識である私学以外ではこのような行動は期待出来なかったであろう^{24, 64)}。

b) 東京大空襲に際して

昭和20年(1945)5月24日と25日、米空軍210機による空襲で医学部・病院の木造建築は全焼、信濃町キャンパスの全建物の三分の二は焼失した。5月25日の朝日新聞は「勝利は若い者の力に。慶應病院の入院患者全員救出」の見出しで、次のように報じ

ている。「情熱と力溢れる学徒挺身隊80名、看護婦270名と医局員の一致敢闘により建物を猛火から救ったばかりでなく、重軽症混せて180名の入院患者をかすり傷一つ負わず無事救助し了えた。加えて、防護団長鎮目専之助小児科部長よりの退避指令と同時に20名の担送車患者を中心に主任看護婦の導く晒し胴じめの急造誘導綱を手にな列になって闇の中をコンクリート建別館と付近の国民学校(小学校)へ緊急避難を了えた。激しい被爆の中にも拘らず入院患者を無事待避させると共に焼夷弾を手づかみで投げ捨てる」など若い学生と看護婦の活躍を激賞している³⁰⁾。

9. 建築物・家具・掛け軸など

医学部・病院の建築物の大部分は、塾の基金、塾員を初め多くの関係者の寄付、銀行融資、企業からの寄付、財団などからの寄贈などによる。ここでは、団体、企業、財団などからの寄贈およびそれに準ずるものに限定して述べる。

a) 食養研究所

病院開設の大正9年頃、日本では脚気病が流行していた。大森憲太教授はビタミン不足の食事と脚気病の発症との関係を証明した。これを契機に、栄養学の認識が高まり、三井の益田孝は日本人の栄養向上を図る必要があると考え、大森教授に研究所を寄贈することを計画した。益田孝、門野幾之進、団琢磨、根津嘉一郎、桐島像一、森村市左衛門らが率先して同志を勧誘し資金を集め、大正13年(1924)8月11日に医学部に寄付した。635坪で、大正15年8月31日に竣工した。現在の煉瓦館の位置にあった³⁰⁾。

b) 予防医学教室

草間良男教授の尽力により、ロックフェラー財団の寄付金39万円で、昭和4年4月、779坪の教室が竣工した³⁰⁾。この建物の正面玄関の左右のスロープと二階のテラスを支えている柱のうち右側の柱の根本に一辺約5cmの六角形の傷がある。右スロープの傷はやや浅く観察し難い。これらは昭和20年5月25日の米軍機による空襲時に投下された焼夷弾の弾頭の圧痕である。米国の好意による建物に米軍の爆撃の痕跡が残っている事になる(医学部新聞第465号、平成2年3月発行)。

c) 特殊薬科学研究所

味の素株式会社の鈴木三郎助の篤志により建設された。味の素本舗金尾清造顧問と阿部勝馬教授(薬理学)を介しての話であった。現在の先端医科学研究所の建物の東端に当たる位置にあった。昭和14年(1939)

10月15日竣工した。現在はない³⁰⁾。

d) 予防歯科医学研究所

東京丸見屋商店主三輪善兵衛の篤志寄付により、現在のワックスマン財団の位置に建てられた。日支事変の最中で、万難を排し、昭和15年5月に建てられた。岡田満教授(歯科学)がゼオライトを含む磨歯剤を考案し、それが「ゼオラ歯磨」としてミツワ石鹸本舗丸見屋商店から発売された関係であった(医学部新聞第477号、平成3年3月発行、歯科ペンクラブ537号、平成19年4月刊行)。戦災に遭い現在はない。

e) は号病棟

日本興業銀行が職員の肺結核対策の一環として、同銀行の委託病棟を作る計画で建てられた。昭和25年11月18日に竣工。169坪余、建築費260万円、215床、完成は昭和27年2月であった。当初の目的を達成し昭和42年医学部の助教授・講師室に転用された。新棟建設時に撤去された²⁹⁾(医学部新聞第505~510号、平成5年7~12月発行)。

f) 基礎第二校舎

昭和36年、アメリカのチャイナ・メディカル・ボードよりの寄付金3万ドルを主体に建設された²⁹⁾。校舎前の樹木は、関田潔教授が前田友助元教授(赤坂前田病院長)の別荘から頂いて来たものである(医学部新聞第459号、平成元年9月発行)。

g) 基礎第三校舎(東校舎)

ロックフェラー財団の好意により昭和32年10月に竣工した²⁸⁾。

h) 西病舎

関東大震災の直後大正12年(1923)10月、済生会は、罹災傷病者救済のため、医学部の西側の用地を無償で借り受け、臨時病院を建設し、その医務の経営は医学部が引き受けた。救済事業終了後、大正14年7月に東京府は同病院を借り受けて、簡易療養所を設置するが、医療は従来通り医学部が引き受けた。さらに、昭和3年3月簡易療養所の閉鎖と同時に医学部は済生会より同病院を借り受け直接経営することとし西病舎と称した。学用患者を主とし有料患者をも収容していたが、昭和6年3月1日閉鎖し、その建物を取り払った跡へ地階共5階の鉄筋コンクリート建て病棟を新築した。現在の別館である²⁴⁾。この経過は寄付行為ではないが、使用と医務を担当したケースである。何故済生会に無償で土地を貸し、そこに建てた病院をやがて慶應が使うことになったのか、については特に記載された説明は見当たらないが、次の点は判断の材料になるのではないだろうか。すなわち、北里は明治

44年(1911)に恩賜財団済生会の評議員を委嘱され、大正4年10月に済生会病院長(初代)、震災の直前の大正12年7月に同院長を辞し、同年11月に創立した日本医師会の初代会長に任命されている。日本医師会はともかくとしても、震災の2ヶ月前まで済生会病院の院長であったことは慶應医学部と関係しやすい関係を想像させる。

その他、病棟の一部屋、研究・診療・教育機器、絵画など、好意による寄贈は非常に多いが、ここでは

i) 戦後復興時における大量の家具寄贈について述べる。

寄贈の経緯については少し説明を要する。昭和19年5月、医学部は当時の大東亜省(現在の外務省)の要請を受け入れビルマ(現在のミャンマー)に医療班を派遣することになった。約40人の構成で前田和三郎教授班長、植村操教授副班長(事実上の指揮者)であった。この時、大東亜省の会計課長をしていたのが根道広吉氏である。同氏は敗色濃いビルマ地区で戦線の後方であるにしても、在京の他有力校が断ったのに、慶應義塾大学医学部が医療班を派遣してくれる事に大変感激し、手厚い世話をした。医療班は昭和19年7月30日に輸送船で出発、潜水艦の襲撃、マラリアと赤痢に怯えながらマニラ、シンガポールを経てラングーンに到着し11月3日に診療所開設。現地の人に喜ばれ、常に満床であり外来は毎日200名を越えていた。しかし、戦況は著しく不利となり昭和20年4月26日病院を閉鎖。小舟でラングーンを脱出、以後泰緬鉄道の無蓋車で14日かけてバンコクに到着、ここで終戦を迎え、昭和21年6月帰国した。この間数回の米軍機の機銃掃射により看護婦二人が死亡、班員数人が外傷を負った。根道氏は困難を克服して班員を帰国に導いた植村副班長の指揮を高く評価した。昭和23年根道氏は眼疾患治療のため植村教授を訪ねた。当時、根道氏は特別調達庁の総裁であった。この時期、病院はまだ焼け跡のままであった。「慶應はどうする予定か」と尋ね、「とにかく片付けなければならないではないか」と意見を述べ、役所のブルドーザーをガソリン代のみ慶應の負担で貸して下さる事になった。その時、「慶應は卒業生が募金して病院を建てる計画を進めている所だ」と話した処、「さすがに慶應だ。自分にも手伝わせて欲しい。については、下町に特別調達庁の大きな倉庫があり、そこには進駐軍が家屋を接收した時に放出された家具が沢山ある。それを、大蔵省にいわせて再建を自分で進めている慶應病院に無償で貸したいと話して許可をもらうから、とにかく、事務員をよこして必要な家具をチェックするように」と言っ

た。その家具は時価 800 万円位で、無償で借りた。丁度、病院の建築は出来たが、家具を購入する資金が足りない状況にあった。半年程経過した時、来てくれと言うので、植村教授が訪ねると、「あれは、もう破損して使用に耐えないという手続きをしたから、二束三文で譲ろう」という事になり、確か 20 万円を支払った。以上は医学部 60 周年記念誌³⁰⁾、植村名誉教授の口述（三四会で録音）と医学部新聞 第 543 号、平成 8 年 10 月発行の記事による。結果、戦後再建された木造の本院では外来の廊下にあった待合の長椅子を除いて全部上記の家具で足りた事になった。したがって部屋ごとに家具は異なり病院全体としては不揃いであつたと聞く。

10. 額に残る福沢諭吉、北里柴三郎の訓言

福沢諭吉については「独立自尊迎新世紀」と「贈醫」、北里柴三郎については「終始一貫」が医学部内にある。

a) 独立自尊迎新世紀

昭和 10 年頃、植村操教授（眼科）の患者中村氏（赤坂星ヶ岡茶寮主人）が弟の印刷所に依頼して作成した複製を植村操教授に贈った。後に植村操名誉教授は新棟落成時に医学部も新しい時代を迎えるという記念に当時の植村恭夫医学部長に贈った。一説によると三越が義塾の了解を得て数部複製しそのうち何本かを義塾に寄贈したようだが、その間の事情は明らかではない。この掛け軸は医学部長室にある。原幅は、三田の義塾図書館所蔵（医学部新聞第 494 号、平成 4 年 8 月発行）。

b) 贈醫

草書による七言絶句である。

無限輸贏天又人	（無限の輸贏天また人）
医師休道自然臣	（医師 道 ^い を休めよ自然の臣なりと）
離婁明視麻姑手	（離婁の明視と麻姑 ^{まこ} の手と）
手段達辺唯是真	（手段の達するの辺 唯是れ真なり）

解説：医学というものは、自然と人間（天また人）との限りない知恵比べ（輸贏＝負け勝ち）の記録のようなものである。医師よ、自分たちは自然の家来に過ぎないなどと言うてくれるな。離婁のようなすばらしい眼力と麻姑のような行きとどいた手をもって、あらゆる手段を尽してこそ初めてそこに医業の真諦が生まれるのである（あらゆる手段を尽くすことこそ医学の真髄なのだ）。

註釈：「自然臣」とは直接には恩師緒方洪庵の「自

然之臣也」と題する和歌を踏まえている言葉であるが、我が国における西洋医学の開祖とも言うべき杉田玄白の造語「医事不如自然」（医事は自然に如かず）以来広く深く信奉されてきた観念である。これは古代ギリシャの名医ヒポクラテスの「人間の身体には健康に復そうとする自然の力（physis）があり、医者はその力を助けるのが任務である」という考え方に由来する。しかし、福沢諭吉は「自然之臣也」などと納まっていなくて、自然を人智でもって征服する過程が進歩なのだと考えていたのである。「離婁」（リロウ）とは中国の伝説上の人の名前。百歩離れた場所にある毛ほどの小さいものも見わける視力を持つという。「麻姑」（マコ）は仙人の名。手の爪が長く、鳥のようだったという。麻姑搔痒という言葉は、麻姑に、自分では手が届かない痒いところを搔いてもらおうとさぞ気持ちがいいだろうということ。所謂「孫の手」の語源は「麻姑の手」である^{46, 59)}（医学部新聞第 495 号、平成 4 年 9 月発行）。この額は第一会議室にある。

c) 終始一貫

北里の座右の銘であり北里の生き方そのものを象徴している訓言であると言われる。人間はいかなる場合にも、自分の主義主張を変えないで行うことを指している。額は北里家、慶應義塾大学医学部学部長室、北里研究所および、医学部史料委員会が北里図書館に保管してるものの 4 種ある。平成 18 年、北里研究所を訪ねていた時、北里柴三郎記念室の責任者である中瀬安清名誉部長から、オリジナルは二つあり一つは北里家にあるが、もう一つは慶應にあると思うが知らないか、という質問を受けた。学生に与えたと聞いたとの話であった。その時点では、医学部新聞（第 504 号、平成 5 年 6 月発行）にこの書のオリジナルの一つが北里から何時、誰に渡され、やがて医学部へ寄贈された経過が既に記載されていることを思い出せなかったので、早速、池田康夫医学部長に、事務系に依頼して医学部内を捜すようお願いした。結果、史料委員会が北里図書館に保管しているとの報告が来た。これは、昭和 6 年（1931）3 月卒業の 9 回生の卒業写真帖に掲載されているものの原本で、卒業アルバム委員であった三谷健次博士が所有していた。他界された時に子息の三谷哲史博士（39 回生）がアルバムに挟まっていた書を見付け、平成 4 年（1992）4 月 7 日に史料委員会を通じて寄贈された事が分った。子息の話では、尊父は北里に書をお願いしたがなかなか書いていただけず最後には院長室まで上がってお願いし、やっと書いていただいたとの事であった。なお、北里はその年

(昭和6年)の6月13日に逝去された。

11. 福沢諭吉、北里柴三郎と医学

両者共、幼少時には四書五經の素読など漢学を学んで育ってきたが、医家の出身でもなく、医学の雰囲気の中に育った訳でもない。

a) 福沢諭吉

自伝³⁾によると、少年の頃から至極元気で時として大言壮語したことも多いが、生れつき気の弱い性質で殺生を嫌い、人の血を見ることは大嫌い。たとえば、適塾の頃、腕の血管から血を採る時、自分でも他人でも採血時に血の出るのを見て、心地良くないから目を閉じて見ないようにしていた。文久2年(1862)にヨーロッパ視察の折⁶³⁾、6月29日(陰暦)にベルリンの病院を視察していた時に、子供の斜視の手術を見ていたところ気分が悪くなり逃げ出したと語っている。ベルリンではシャリテイ病院以外に訪れていないので、この病院での話であろう。また、8月10日(陰暦)にはロシアのペテルスブルグ(現在のレニングラード)の陸軍病院で石淋(膀胱結石)の手術を見ていた。医師が刀を執ってグッと刺すと大量の血が迸って医師の白衣が真っ赤になり、それから切り口に釘抜きのような物を入れて膀胱の中にある石を取り出した。その内に自分は変な心持ちになり、何だか気が遠くなった(失神)。山田八郎という男が私を外に連れ出し、水などを飲ましてくれてやっと正気にかえった。従来、物理学に憧れ専門家になろうと思ったことはあるとの記録はあるが(前述)、医師になる希望の表明はない^{3, 43, 46, 47, 49)}。

b) 北里柴三郎

慶應2年(1862)熊本 of 儒者兼医者田中司馬の塾に入りやがて藩儒柝原助之進の門下生となる。ここでは儒教よりも武芸の方が盛んであった。18才となった明治2年(1869)細川藩校の時習館に入るが翌年廃藩置県となり時習館は廃校となった。この時、自分としては大阪に開校された陸軍兵学寮に入り、将来は武人となることを希望したが、両親は熊本藩知事細川護久が開いた古城医学所及病院(明治5年に熊本医学校と改称)に進学する事を奨めた。かねてより北里は「我が志は天下国家なり。武を練り文を読んだのはそのため、医者とは坊主は男一生の仕事に非ず」と豪語していた。幕末の海外諸国からの接触、鎖国の解除、外国文化の流入など、社会変動の兆があり、国としての開化の頃、大志を抱く青年達にとって、長袖の徒、医師は魅力ある職業ではなかった。医師はただ病氣や

外傷を治療するだけの賤しい技術「方技」を職業とするものと見られていた。福井藩の侍医の家に生まれ、適塾で蘭学と医学を学んだ橋本左内も14才の時に書いた「啓発録」に「嗚呼如何せん、吾身刀圭の家(医家)に生まれ、賤技に局々として、初年の志を遂げる事を得ず」と医家に生まれた事を残念がっている。しかし、北里は、この際はとにかく両親の勧めに従い医学校に入り、文明開花の窓口であるオランダ語を学び、雄飛する機会を他日に機そうとした。すなわち、軍人志望を胸底に蔵して医学校に入った。それは、必ずしも医者にならなくてもよい。蘭学を学びつつ機を伺う事にした訳である。かくして明治4年2月に古城医学所及病院に入学し、ここでマンズフェルドに出会う。マンズフェルドは北里の優秀なオランダ語の理解力に瞞目し、心から北里を愛して親切に導き、北里もまた師の学識、人格に心服して教えを乞うた。毎夕、師の官宅に招かれ蘭語ばかりでなく地理学まで授けられた。ある時、将来の希望を聞かれ、自分は将来軍人になりたい。その方便としてオランダ語を学んでいる事を話した。マンズフェルドは「人の志はむやみにまげる事は出来ないが、一日を無駄にしてはいけない。医学とて無用の学問ではない。在任中は諸方面の勉強が出来る様に配慮するからしっかり勉強しなさい」といった。そしてある日、顕微鏡下に、肉眼では見えない細胞、組織を見、未知の領域に誘い込む医学の魅力の虜となり、「医学亦学ぶに足る」と感じたのが医学に進む動機付けとなった^{8, 17, 37, 47)}。

12. 両巨頭に共通の諸点

幕末から明治にかけての日本社会を啓蒙し、論理性的の必要を指摘し、自然科学の重要性を説き、その実践として義塾に医学所を導入した福沢と、福沢の没後に、その遺志を受け継いで大学医学科を創設した北里とは、邂逅から九年間の交流であったが、師弟の交誼が結ばれていた。そして、両者の間には幾つかの共通点があることが指摘されている。すなわち、両者共に例を見ない開拓者であり、篤い情宜を体现し、学者としては実学・実践を重んじ、常に気魄に燃えた百折不撓の男子であるが、その根底に流れるものは、人類愛、同胞愛、そして師弟愛という愛の心であった³⁷⁾。さらに、つけ加えるならば、両者共に幼少時には漢学、儒学の教えを受けており、教養の基礎は漢学・儒学から来ているものである。

これらの内、実学における考え方と実践に絞って考察する。実学という言葉は、元来、朱子学や日本儒教(特に伊藤仁斎など)によって江戸時代から使われ重視され

て来たが、それは「日常の生活において仁義五常の道を実践する事」を意味していた。このような江戸時代の実学は「倫理の実学」とも言われる⁴¹⁾。福沢は幕末の三回の渡航で、欧米諸国の自然科学発展による文明開化の状況を体験し、科学技術の成果に強い印象をうけた。そして、医学を初め、物理学、数学、化学、機械学などの学問が、18世紀後半に英国で始まり、その後欧州に広がった産業革命によって如何に発展したか、その道筋を調べた結果「科学を実地に应用する実学」が文明開化の基本にある事を知った⁵⁾。すなわち、欧州の科学革命以後の自然科学的な方法の影響を受けた近代の学問が福沢が想定する実学と考えられる（座談会、福沢諭吉に学ぶ「実学」、三田評論、No.1087、2006年刊）。福沢の渡航は1860年に米国、1862年に欧州、1864年に米国であるので、産業革命の影響が欧米に広がり各国の諸産業が活き活きと動いている時期に相当する。福沢が最初に記載したのは「学問のすすめ」であろうと言われる^{34, 41)}。ここでは実学とは「人間普通日用に近き実学」と言い、たとえば、イロハ文字を習い、手紙の文書、ソロバンの稽古、天秤の取扱などを心得、なおまた、進んで、地理、究理学、歴史、経済学、修身などを学ぶことを挙げている。また、実際に役立つ学問の事、さらに経験や実証に基く学問のことを言う⁴¹⁾。ある機会には振り仮名して「サイヤンス」とも表現している³³⁾。さらに、2～3の説明を挙げると、漢儒の学を虚学視し、それに対するもので、実学の実は儒学の思弁的なに対する「実証の実」、また儒学の浮文的なるに対する「実用的の実」を意味する³⁴⁾。福沢の言う有形の学問すなわち自然科学は宇宙自然の真理に基いて物事の現象の原理や性質を観察し、分析、実験、調査などをして、そこから得られた知見を社会の利益に利用する実学に他ならない⁵⁾。実学には基本と应用到二つの面があると言われる。根本の部分では徹底して科学を通じて真理・真実を追求する。その成果をどのように使うか、に関しては、状況に応じて人として当たり前の日常生活に役立て、また、学問を実社会に用いて役立てる事を指す。たとえるならば、コンパスの軸のところが基本編（根本）であり、コンパスの円を描くところが応用編ということになる（座談会、前記）。

一方、北里は研究の到達点を実学に置き、研究成果の実践的応用を常に心掛けるように指導していた。具体的には、研究の実施に際しては、何か実際に役に立てよう、あるいは、研究の方法手段の助けになるように心掛ける。また、実際の治療あるいは予防の上に実益になるという方向に向かって研究計画を建てる。そして、得た事実の中に少しでも役に立つものがあれば、速やかに実施に移

すなどが指導の内容であった。北里は、基礎的学問（サイエンス）から応用的学問（テクノロジー）への移行の重要性を示し、リサーチ・アンド・ディヴェロップメント（R&D）を科学的発展のための両輪と捉えていた。そして、秩序立てて積み重ねられた研究ならば応用の道は自ら拓かれるとの信念を持っていた。北里の医療に対する基本的理念は明治11年（1878）、東京大学医学部在学中に纏めた「医道論」の中に実学的考えを見ることが出来るが、要点は次の通りである。すなわち「摂生保険の道を説いて病を未然に防ぐことが医の本道である。病気の原因解明と治療、つまり医術を徹底的に理解しないと達成できない。真の医を施すには医術の充分な研究が必要である。精巧で奥深い医術を究めてはじめて達成し得るから、医学を志す者は理論、技術とも甲乙なく徹底的に研究する必要がある」。その考え方の由来は青年期に体験した熊本実学党の教えにあると言われる。そして、熊本の実学派の横井小楠への私淑から来ていると言われ、「科学に基づく研究は自ずと応用の道が開ける」と信じていた³⁸⁾。実学党の教えとは「学問を志す以上は、世の中のためにならねばならぬ。ただ知識として持っているだけでは意味がない」と言うものであり、北里はその教義を咀嚼し「医学における実学の精神」として結実させたと考えられる⁴⁴⁾。すなわち、北里生来の精神基盤である報恩、開拓、英知と実践、不撓不屈⁵⁾の具体化の一面であった。慶應義塾大学医学部の創設の折りに「基礎と臨床の密接な交流を図る」と宣言した意味は、従来の大学におけるように、教室単位の縦割りの体制で研究活動と臨床の活動を別々に行われるのではなく、基礎的な研究の成果を臨床の防疫、治療に速やかにかつ着実に役立たせるために、学部内での各活動・情報の交流を円滑にして実を挙げよという意味と理解される。その背景には、一科の進歩というものは、他科の発展を促すものであり、相助け合い、そこで初めて人類の福利を増進する事ができる⁴⁴⁾との期待があった。すなわち研究の場の如何に拘わらず、綿密な研究の後、成果を実行に移せという実学の奨めである。

かくして福沢は欧米に遅れをとった日本社会を啓蒙する目的で、西洋社会を研究し、分析して諸種の情報を日本にもたらし、執筆して人々に情報を与えて向上心を誘い、やがて教育機関としての大学を作る行動を起こした。北里は日本国民の福利、日本の医療の発展を目指して医学の研究を疾病の予防・治療に取り入れて実践した。経過は異なるが二人が共に到達した点が「理論に基礎を置いた実践」の「実学」であった。福沢の実践が慶應義塾医学所を生み、福沢の意志と北里の実践が大学医学部の

設立を現実のものとした。

結 語

福沢諭吉は不穏な社会変動の可能性を潜めた幕末に、西洋文明を肌で感じる機会を得、西洋の社会情勢を広く観察し、その中で医学・医療の状況を知り、日本と外国の医学の違いを医学外の立場から切実に感じていた。そして、物事の科学的認識の必要性に目覚め、医学の教育過程刷新の重要性を感得した結果が、やがては難波 正の提言による鎌田塾長の英断と北里柴三郎の実行により、文科系大学の中の医学部誕生に連なったのである。本来は、医学には関係のない環境の中に育った福沢・北里兩人であるが、医学部は福沢諭吉の啓蒙思想・漢方からの脱出、自然科学教育重視の方針と、北里柴三郎の報恩の心構えと、自分自身で「学ぶに足る」と見出した医学への熱意とによって創成されたと言える。福沢においては、実兄の優れた指導が塾での勉強の機会を与え、科学への開眼を誘った。そして、木村摂津守が与えてくれた咸臨丸乗船渡米の機会は、その後の欧米視察に連なり、広く諸外国の文化を知る有効な契機となった。それらの好指導と好意を十分に生かした彼の努力と吸収力が、やがて創作意欲を刺激し、日本の社会および教育の啓蒙者としての将来を決定づけ、慶應義塾大学発足の原動力となり、延ては医学部創設の引き金となった。北里柴三郎はマンスフェルドの熱心な指導によって開眼し、長与専斎の指導と福沢の恩誼に感謝しつつ秀でた実行力により大学医学部を現実のものとした。

稿を終わるに当たり、史料収集における福沢研究センター西沢直子准教授および信濃町メディアセンター(北里記念医学図書館)館田鶴子事務長の助力に心から感謝する。

文 献

- 1) 伴 忠孝, 適塾と長与専斎 創元社 昭和62年
- 2) 福沢諭吉全集, 第8巻 岩波書店 昭和35年
- 3) 福翁自伝, 岩波書店 昭和53年
- 4) 福沢諭吉書簡集, 第7巻 岩波書店 平成14年
- 5) 藤江邦男, 実学の理念と起業のすすめ 福沢諭吉と科学技術 慶應義塾大学出版会 平成16年
- 6) 石川幹明, 福沢諭吉伝 第4巻 岩波書店 昭和7年
- 7) 石田純郎, 天然痘の流行, 種痘の伝来と普及, 緒方洪庵と蘭学 思文閣出版 平成4年
- 8) 伊藤真次, 佐野 豊, 日本医学のパイオニア(1)―明治に育った医星 丸善京都出版サービスセンター 平成

- 14年
- 9) 加地伸行, 儒教とは何か 中公新書 989 平成2年
- 10) 鎌田栄吉, 慶應義塾と医学の関係 三田評論 第227号 大正5年6月
- 11) 鎌田栄吉, 慶應義塾と医学の関係(続) 三田評論 第229号 大正5年8月
- 12) 神谷昭典, 日本近代医学のあけぼの 維新政権と医学教育 医療図書出版社 昭和54年
- 13) 神谷昭典, 日本近代医学の定立 私立医学校済生学舎の興廃 医療図書出版社 昭和59年
- 14) 川嶋真人, 蘭学の泉ここに湧く 豊前中津医学史散歩 西日本臨床医学研究所 平成4年
- 15) 菊池 功, 福沢先生と窮理学 三田評論 第946号 1993年
- 16) 北 康利, 福沢諭吉 国を支えて国を頼らず 講談社 平成19年
- 17) 北里柴三郎伝, 北里研究所 昭和7年
- 18) 北里柴三郎記念館, 学校法人北里学園 松濤企画 昭和62年
- 19) 北里文太郎, 慶應義塾医学所(上) 日本医史学雑誌 第1309号 昭和17年
- 20) 北里文太郎, 慶應義塾医学所(下) 日本医史学雑誌 第1310号 昭和17年
- 21) 楠 卓一, 西真一郎論述: 日本儒教の精神―朱子学・徂徠学 淡水社 平成10年
- 22) 串田久治, 儒教の知恵 中公新書 1685 平成15年
- 23) 慶應義塾大学医学部十周年記念誌, 昭和6年
- 24) 慶應義塾七五年史, 昭和7年
- 25) 慶應義塾大学医学部二十周年記念誌, 昭和15年
- 26) 慶應義塾百年誌 上巻, 昭和33年
- 27) 同 中巻(前), 昭和35年
- 28) 同 別冊(大学篇), 昭和37年
- 29) 同 下巻, 昭和43年
- 30) 慶應義塾大学医学部六十周年記念誌, 昭和58年
- 31) 小池猪一, 図説 日本の“医”の歴史 下, 大空社 平成5年
- 32) 小池猪一, 医(意)外史 日本小児医事出版社 平成8年
- 33) 小泉信三, 「解説」福沢諭吉著 学問のすすめ 岩波文庫 410 昭和17年
- 34) 小泉信三, 福沢諭吉 岩波新書 D116 昭和41年 1966年
- 35) 小室正紀, 江戸の思想と福沢諭吉 三田評論 No.1077 2005年
- 36) 子安宣邦, 福沢諭吉『文明論の概略』精読 岩波現代文庫 1100, 岩波書店 2006年
- 37) 長木大三, 北里柴三郎とその一門 慶應通信 平成元年
- 38) 中瀬安清, 世界の細菌学者 北里柴三郎先生の細菌学 日本細菌学雑誌 58巻4号 2003年
- 39) 中瀬安清, 北里柴三郎資料館 54 北里研究所 平成19年
- 40) 永田守男, 福沢諭吉の「サイアンス」 慶應義塾大学出版会 平成15年
- 41) 西川俊作, 実学 三田評論 No.1043, 2002年
- 42) 野村 茂, 北里柴三郎と緒方正規 熊本日々新聞社 平成15年

- 43) 大田臨一郎, 福沢諭吉と医学 福沢手帳 第 32 号 昭和 57 年
- 44) 大村 智, 解説「北里柴三郎博士」山崎光夫著 北里柴三郎(下) 中公文庫 2007 年
- 45) 佐々木正五, 福沢先生と医学 三田評論 第 935 号 1992 年
- 46) 佐々木正五, 福沢先生と医学 福沢記念選書 51 平成 4 年
- 47) 佐々木正五, 福沢先生と北里先生 北里研究所病院創立 100 周年記念 平成 5 年
- 48) 佐志 伝, 木村芥舟, 長尾幸作一咸臨丸の人々 三田評論 No.1080 2005 年
- 49) 佐志 伝, 福翁自伝の研究(本文編) 慶應義塾大学出版会 平成 18 年
- 50) 柴田利雄, 福沢諭吉のレガシー 丸善株式会社 平成 19 年
- 51) 杉本つとむ, 江戸の阿蘭陀流医師 早稲田大学出版部 平成 14 年
- 52) 砂川幸雄, 北里柴三郎の生涯 NTT 出版株式会社 平成 15 年
- 53) 竹内 均, 人体を探究した科学者 ニュートンプレス 平成 15 年
- 54) 谷口真也, 福沢諭吉の理科絵本「窮理図解」の面白さ 科学的考え方を身近に 三田評論 No.1103 2006 年
- 55) 土屋雅春, 医者を見た福沢諭吉 中公新書 1330 平成 8 年
- 56) 戸沢行夫, オランダ流御典医「桂川家の世界」築地書店 平成 6 年
- 57) 富田正文, 訓蒙 窮理図解 福沢諭吉選集 第 2 巻 岩波書店 昭和 56 年
- 58) 富田正文, 福翁百話 福沢諭吉選集 第 11 巻 岩波書店 昭和 56 年
- 59) 富田正文, 「考証 福沢諭吉」下 岩波書店 1992 年
- 60) 豊田利幸, 福沢諭吉と自然科学 福沢選書 1 昭和 45 年
- 61) 安田健次郎, 西洋医学の伝来とドイツ医学の選択 慶應医学 82 巻 2 号 平成 19 年
- 62) 山内慶太, 長与専斎・北里柴三郎・福沢諭吉と「医友」書簡に見る福沢人物誌 三田評論 No.1089 2006 年
- 63) 山口一夫, 福沢諭吉の西洋巡歴 福沢諭吉協会叢書 文化総合出版 昭和 55 年
- 64) 山崎光夫, ドンネルの男・北里柴三郎(下) 生誕 150 年 日本経済新聞 平成 15 年